

東洋學藝雜誌第三十四號

動物分類ノ方法

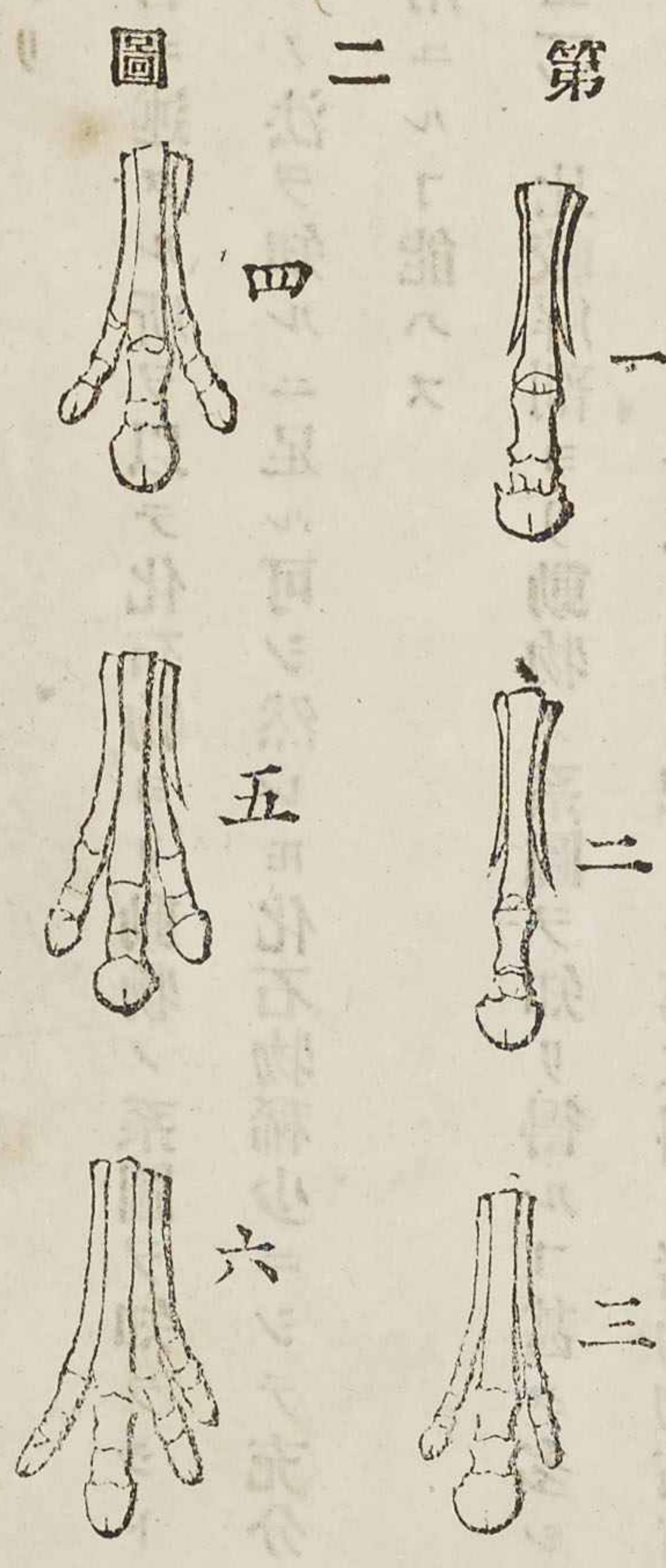
(前號ノ續キ)

東京大學教授箕作佳吉述

(一) 化石物ニ據リテ動物ノ系圖ヲ推究セントスルハ最モ確實ナル方法ナリ若シ始ヨリ今ニ至ルマテ現出シタル動物ノ種類盡ク化石物トナリテ残り居ラハ動物ノ系圖ヲ見出スハ容易ノコナリ然レドモ不幸ニシテ化石物ハ其種類甚タ少ク是ヨリ動物ノ系圖ヲ組立ンコ所詮爲シ能フ可キニ非ス然レドモ地球上化石物ヲ見出スマメ綿密ニ調ヘタル地方ハ僅ニ歐洲及ヒ米國ノ一部ノミニシテ其他ハ未ダ手ヲ下サザル地方實ニ多シ若シ此等ノ研究盡ク成就シタランニハ大ニ學術上得ル所モアルヘシ現今知り得タル事實ニテモ既ニ大切ナル者少シトセス

茲ニ先ツ一例ヲ舉ン抑モ馬ノ足ヲ見ルニ其指僅ニ中指ノ一本ニシテ此指非常ニ成長シ其先ニ蹄アリテ以テ歩行スルナリ馬ノ膝ノ如ク見ユル者ハ其實ハ膝ニ非ス手ノ節ナリ此ノ如キ構造ハ馬チシテ速ニ走ラシムルヲ得ル爲ナリ

然レモ獸類ハ總シテ五本ノ指アルモノナリ馬ノ類ノ如キハ實ニ奇ト云ハサル可カラス若シ馬ノ系圖ヲ作ラントセハ抑モ如何ニシテ此ノ如キ奇ナル足ノ起リタルヤチ見サル可カラス幸ニシテ米人マーシ氏ノ研究アリテ此点ニ就キ判然タル答ヲ爲スコヲ得ルナリ馬ハ抑モ大古ニハ五本ノ指ヲ持チタルカ速ニ走ルカ爲ニハ足ノキヤシヤナルコト要用ナレハ次第々々ニ指ヲ失ヒ遂ニ今日ノ有様ニ至リ走ルニ最モ便利ナル構造ヲ得タルコト明白ナリ第二圖ハ現今ノ馬及ヒマーシ氏ノ合衆國西部ニ得タル馬類化石ノ前足ヲ示シタルモノナリ第一ハ現今ノ馬足ナリ中央ニアルハ



即チ中指ニシテ兩側ニアルホソキ骨ハ人指シ指及ヒ藥指ノ残りナリ是ハ總テ馬ノ骨骼ニ未タ残り居ルナリ

た、あや、く、と、い、ふ、ら、ち、に、午、の、半、も、過、る、比、に、は、か、に、日、暮、に、け、り

宮崎道正 喜多村弥太郎 高松本讓 吉收 上原六四郎

第二ハプリオヒツパス (Pliohippus) ト稱シテ馬ノ化石中最モ新シキ者ナリ馬ヨリ少シ少ナリ足ハ現今ノ馬ノ如シ

第三 是ヨリ稍古キ地層ニプロトヒツパス (Protolippus) ト云ヘル化石ノ馬アリ現今ノ馬足ノ側ニアル二本ノ小骨此類ニ至リテハ大トナリ蹄ヲ帶ヒタリ即チ三指アル類ナリ其大サ驢馬ニ類セリ

第四。次ニミオヒツパス (Miohippus) ナル者アリ三指ノ外ニ小指ノ残り出現セリ

第五。次ニミソヒツパス (Mesohippus) アリ小指稍大ナリ其大サ羊^{シブ}ホドナリ

第六。次ニオロヒツパス (Orohippus) ニバ蹄ヲ帶ヒタル四本ノ指アリ

第七。次ニイオヒツパス (Eohippus) アリ (圖中ニハ示サス) 四本ノ指チ有ス外ニ拇指ノ残りアリ其大サ凡ソ狐ホドナリ

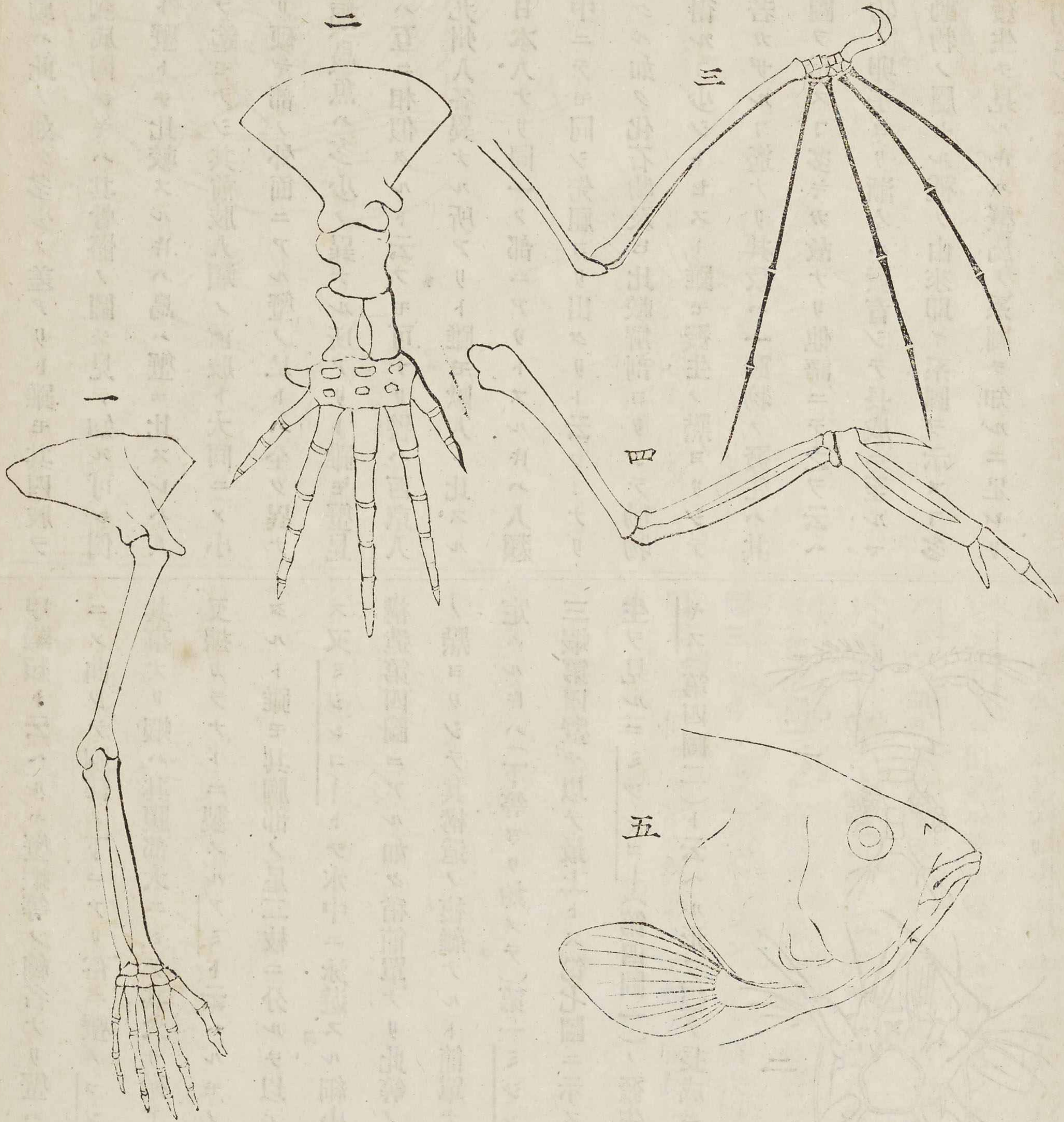
以上ハ此迄ニ發明シタル化石物ナリ今少シク古キニ遡ラハ五本ノ完全シタル指ヲ有シタル馬類アリシハ推シテ知

ル可キナリ然レハ則チ化石物ノ研究ヨリシテ馬ハ五本ノ完全シタル指ヲ有シタル先祖ヨリ出テタルコトハ自ラ明白ナリ

右ニ述タル所ヲ以テ化石物ヨリ動物ノ系圖ヲ知ラントスルノ法ヲ知ルニ足ル可シ然レモ化石物稀少ニシテ充分ニ用ユルコト能ハス

(二) 比較解剖ヨリ動物ノ系圖ヲ知り得ルコト甚々多シ今最モ了解シ易キ一二ノ例ヲ擧ケン第三圖ハ諸動物右前肢ヲ示シタル者ナリ一ハ人間ノ右手ナリ二ハ鯨ノ右鰭ナリ三ハ蝙蝠ノ右翼ナリ四ハ鳥類ノ右翼ナリ五ハ魚類ノ右鰭ナリ鯨ノ鰭ハ魚ノ鰭ト同様水中ニ泳クノ具ナリ然レモ之ヲ解剖スル時ハ其骨骼全ク魚類ト異リ反テ人間ノ骨骼ニ似タリ故ニ鯨ハ魚ノ部ニ屬セスシテ哺乳動物ノ部ニ入ル、可キコト此一點ノミニシテ明白ナリ又蝙蝠ノ翼モ鳥ノ翼モ同シク空中ニ飛フ具ナレモ其異ナルハ一目シテ瞭然ナリ其骨骼ヲ見ルニ蝙蝠ハ手ノ指ノ間ニ膜アリテ以テ飛行スルナリ鳥ハ其腕ニ總テ羽毛アリテ飛フナリ故ニ蝙蝠ノ鳥ニ屬セスシテ哺乳動物ナルコト亦此一點ノミニシテ明白

圖三第



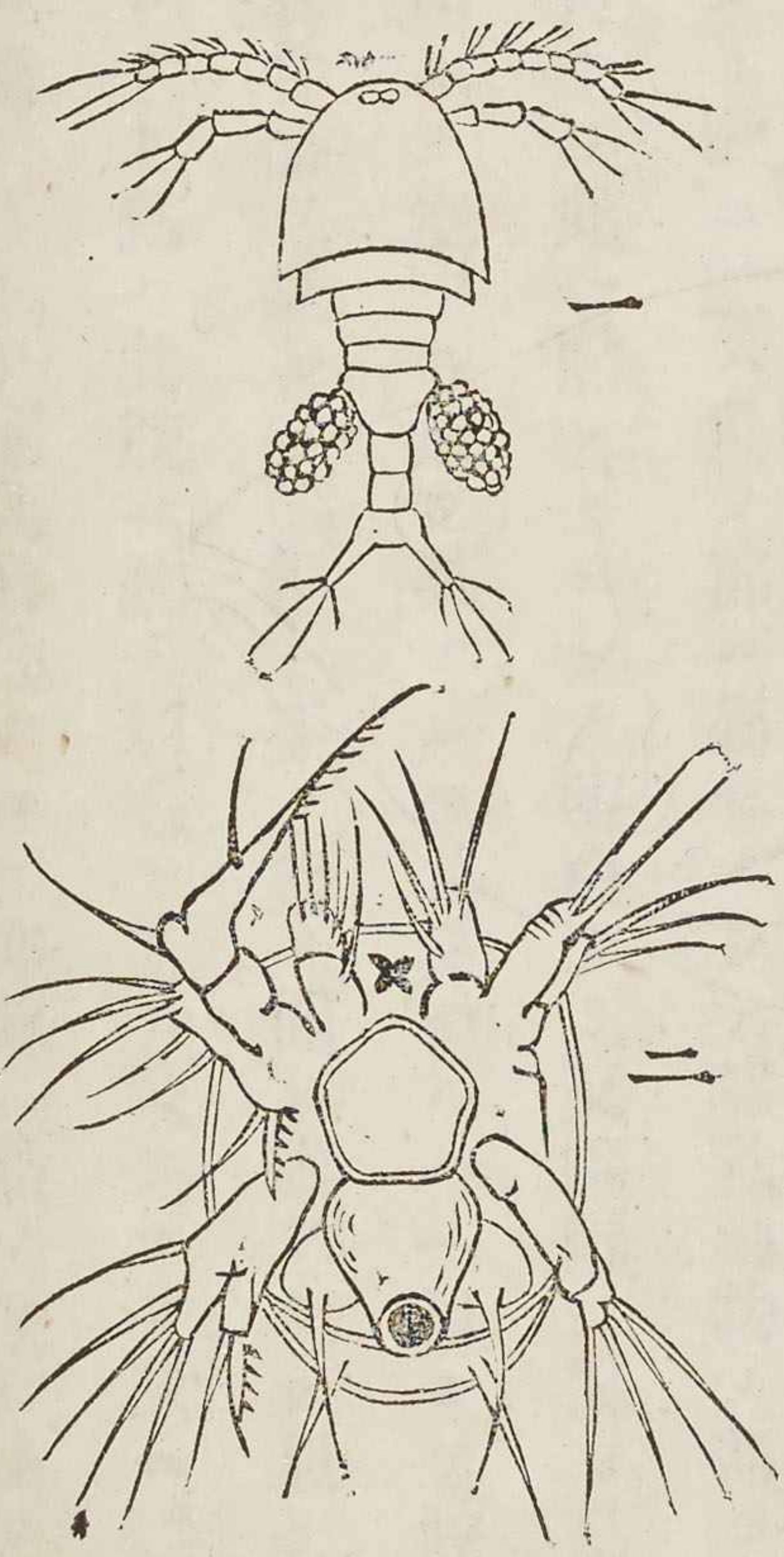
ハ五本ノ完全シタル指ヲ有シタル馬類アリシハ推シテ知

鳥ニ屬セスシテ哺乳動物ナルコト亦此一點ノミニシテ明白

ナリ此等ノ動動ハ此ノ如ク多少ノ差アリト雖モ其四肢ヲ見ルニ其構造到底同シキハ其骨格ノ圖ヲ見テ知ル可シ例ヘハ鳥ト人類ト蟹トヲ比較スルキハ鳥ハ蟹ニ比スレハ人類ニ近キコト云フ迄モナシ其前肢人類ノ前肢ト大同ニ小異ナル而已ナリ硬キ部ノ外面ニアル蟹ノ足トハ全ク異ナレリ故ニ人、蝙蝠、鳥、魚ハ多少ノ異ナル所アリト雖モ蟹昆虫等ト比スレハ互ニ相似タルト云フモ可ナリ譬ハ西京人東京人大坂人九州人各異ナル所アリト雖モ歐人ト比スルキハ皆同一ノ日本人ナリ同一ノ部ニアリトスルキハ人類中ニテモ動物中ニテモ同シ先祖ヨリ出タリト云フコトナリ

(二二) 以上述タル如ク化石物及ヒ比較解剖ヨリシテ動物ノ系圖ヲ探シ得ルコト少シトセスト雖モ發生ノ點ヨリシテ之ヲ尋ヌルニ若カザルコト遙ナリ其故ハ一動物ノ發生ハ其屬スル種ノ系圖ヲ示スコト多キカ故ナリ他語ニテ之ヲ云ハハ若シ一ノ動物ノ卵子ヨリ漸々ニ發育シテ長成ニ至ルマテノ現象ハ該動物ノ屬セル種ノ由來即チ系圖ヲ示スコト多シ例ヘハ蟹ノ發生ヲ見ルキハ蟹屬ノ系圖ヲ知ルニ足レリ今之ヲ細ニ解明セン

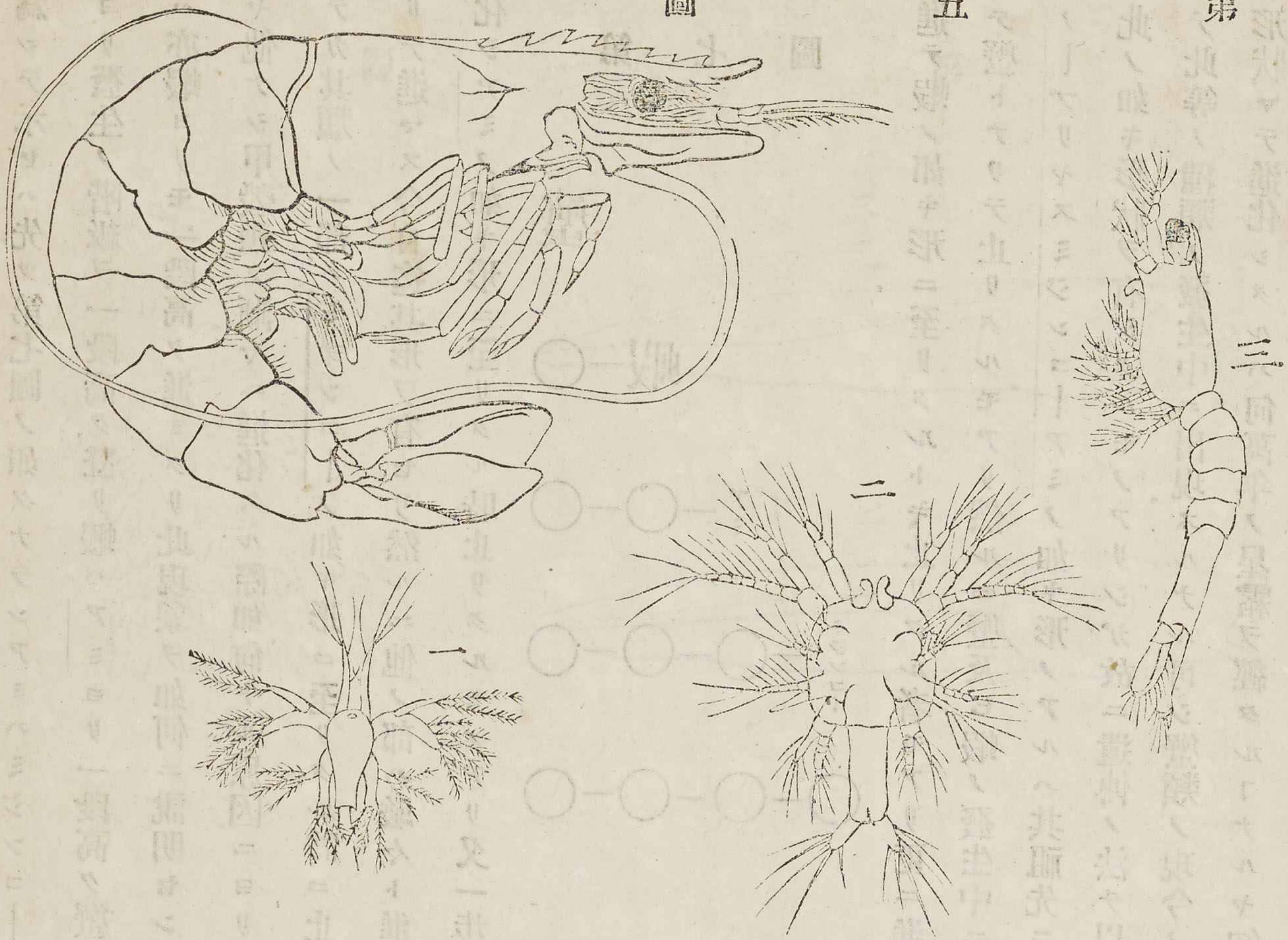
甲殼類ト云ヘルハ蟹蝦等ノ總名ナリ蟹ハ其腹部極メテ小ニシテ胸部ノ下ニアリ俗ニ蟹ノフンドシト云ハ即チ其事ナリ蝦ハ其腹部大ニシテ其大サ殆ド胸部ト同様ナリ又蟹カラナトニ製スルアミト云ヘルモノハ其形狀蝦ニ似タルト雖モ其胸部ノ足ニ枝ニ分ルヲ以テ裂足甲殼類ト爲ス又ミジンコトテ水中ニ泳遊スル細小ノ甲殼蟲アリ其構造第四圖ニアル如ク稍簡單ナリ此等ノ動物ヲ比較解剖ノ點ヨリシテ其構造ノ複雜ナルト簡單ナルトニ從ヒ列ヲ定ムルキハ(下等ヨリ始メテ)第一ミジンコ、第二アミ、第三蝦、第四蟹ヲ以テ最上トス第七圖ニ示ス如シ今此等ノ發生ヲ見ルニミジンコ(第四圖一)ノ發生スルニノープリヤス(第四圖二)ト云ヘル形ヲ經テ長成ニ至レリアミノ發



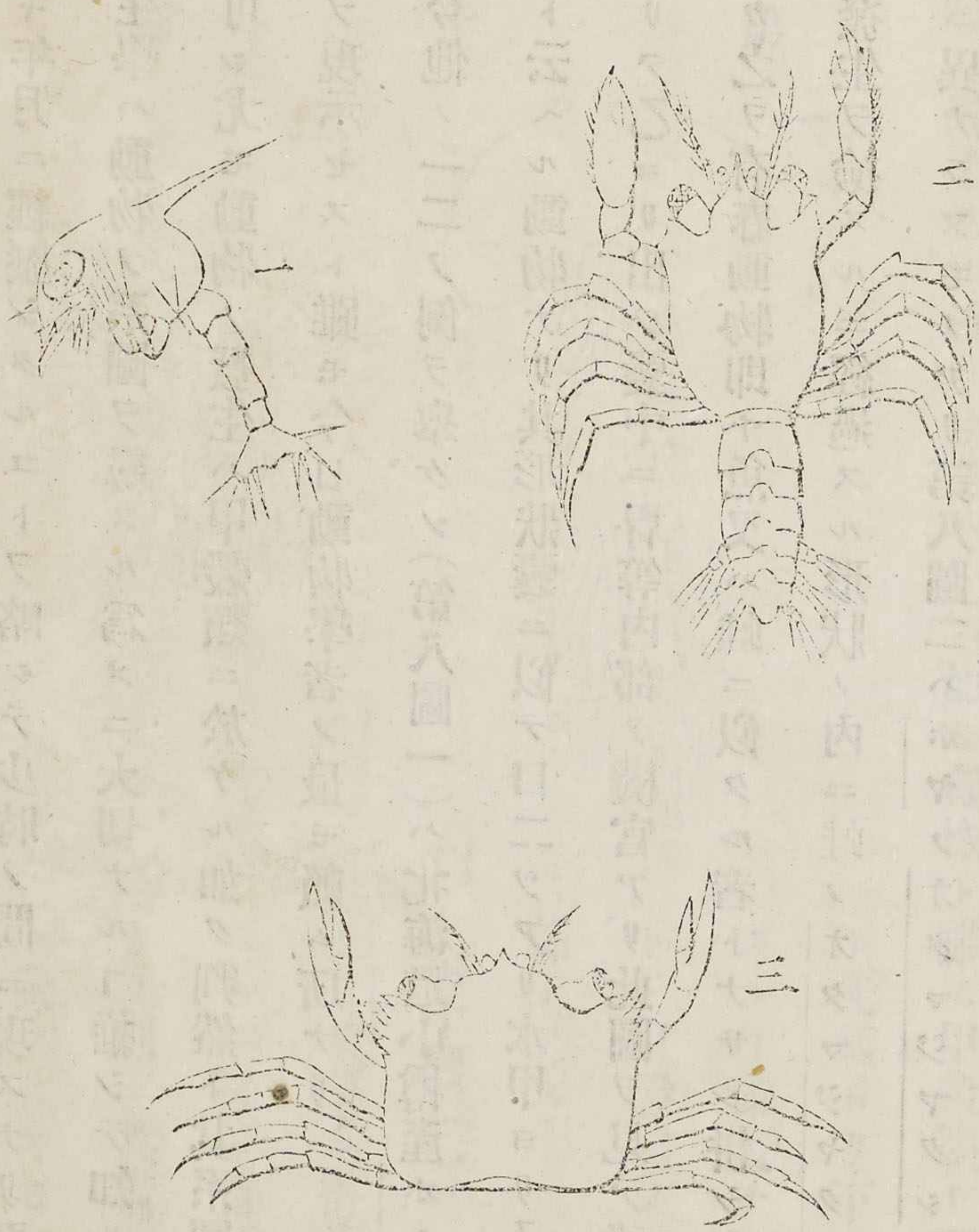
第 四 圖

生ヲ見ルニノープリヤスヲ經ル而已ナラス成長シタルミ

第五圖

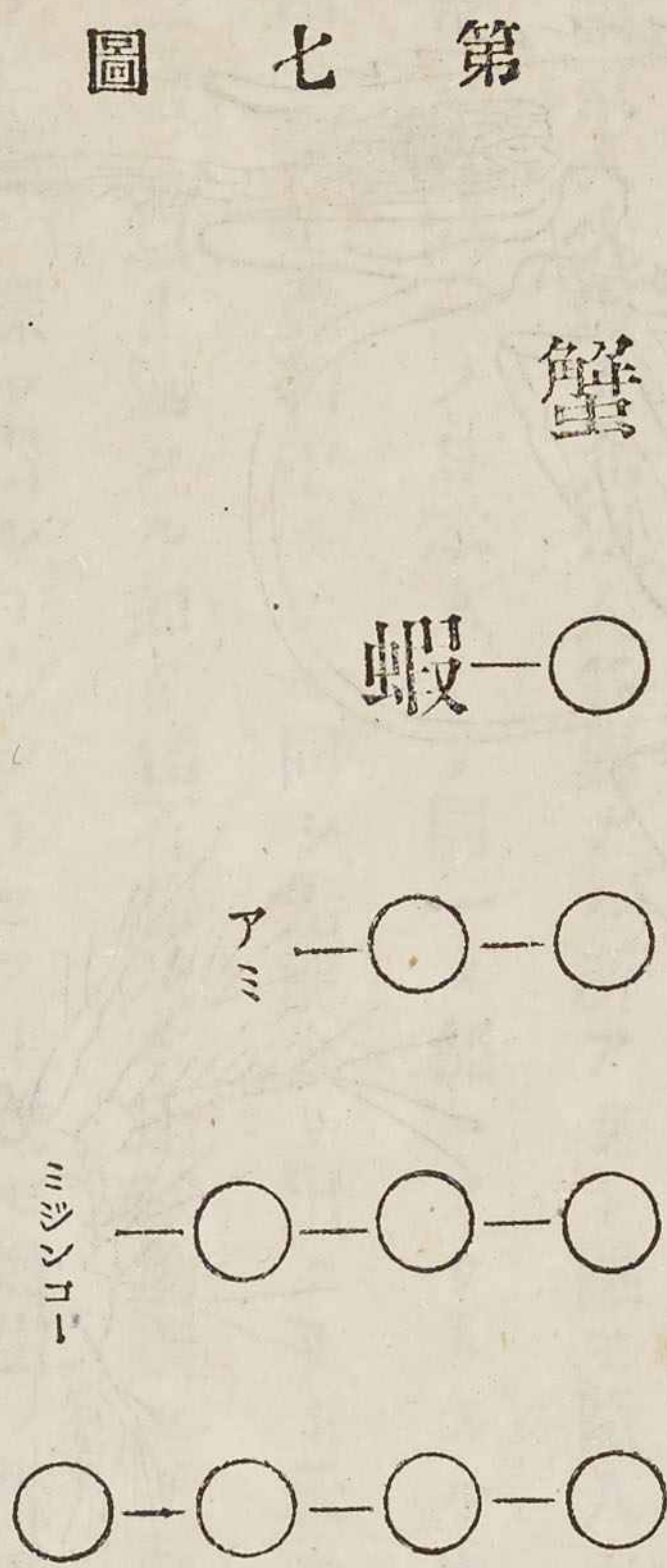


生ヲ見ルニノープリヤスヲ經ル而已ナラス成長シタルミ
 シンコーニ似タル形ヲ經テ長成ニ至レリ蝦(第五圖四)ハ
 アミノ如ク其發生スルヤノープリヤス(第五圖一)及ヒミ
 ジンコー(第五圖二)ノ形ヲ經ル而已ナラス成長シタルア
 ミ(第五圖三)ニ稍似タル形ヲ經テ長成ニ至レリ蟹(第六
 圖二)ニ似タル形ヲ經過シテ始テ成長ニ至レリ之ヲ圖ニ
 第六圖



今之ヲ細ニ解明セン

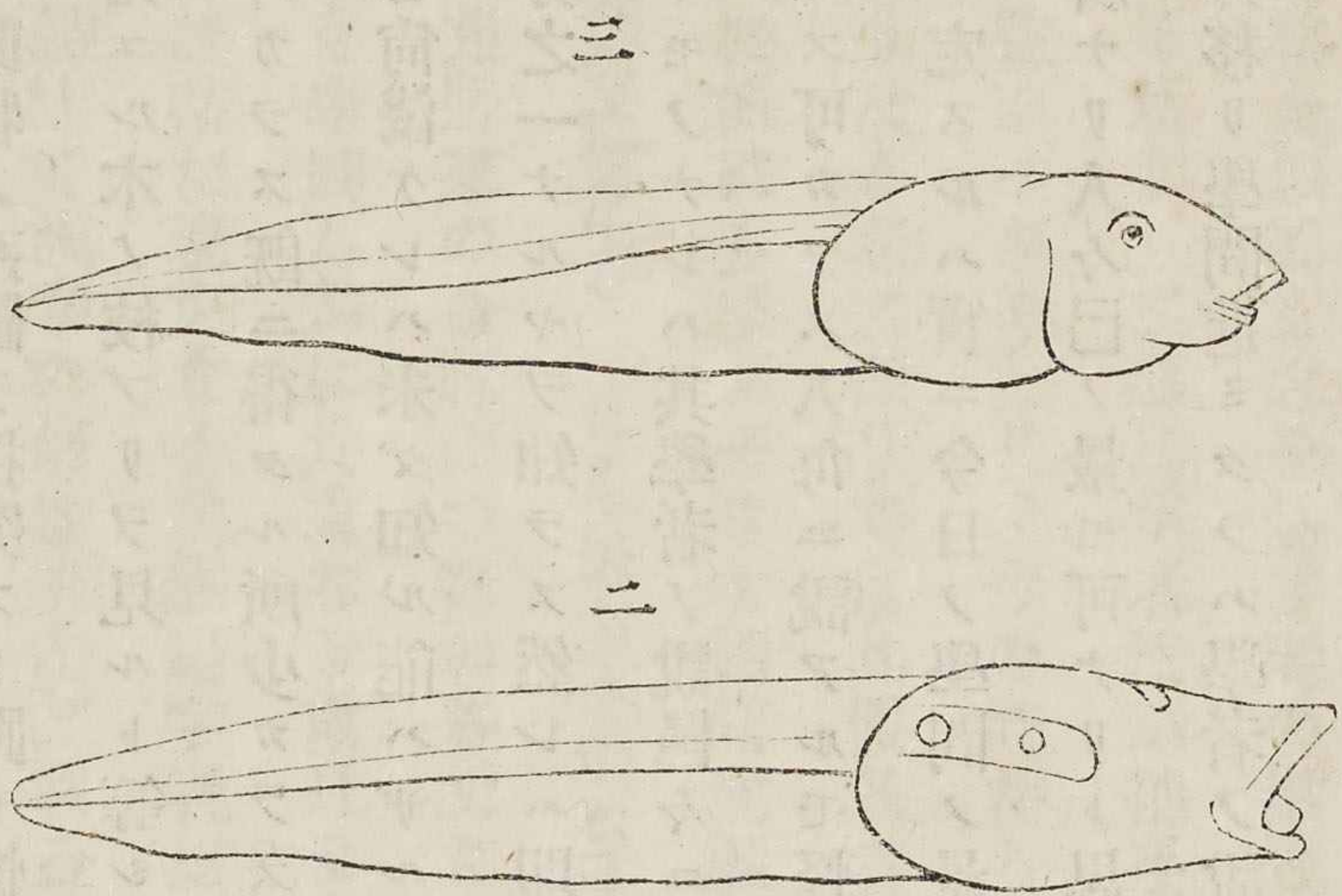
爲シテ示セハ先ツ第七圖ノ如クナランアミハミジンコ
 ヨリ發生ノ階級ヲ一段高ク登リ蝦ハアミヨリ一段高ク蟹
 ハ亦蝦ヨリモ一段高ク進ミタリ此現象ヲ如何ニ説明セン
 ヤ他ナシ甲殼類ノ漸々ニ進化スル際如何ナル原因ニヨリ
 テカ其類ノ一部ハミジンコノ如キ形ニ至リタル時ニ止
 リテ進マス今日迄其形ヲ有セリ然ルニ他ノ部ハ駿々ト進
 化シアミノ如キ形ニ至リタル時止リタルモノアリ又一步



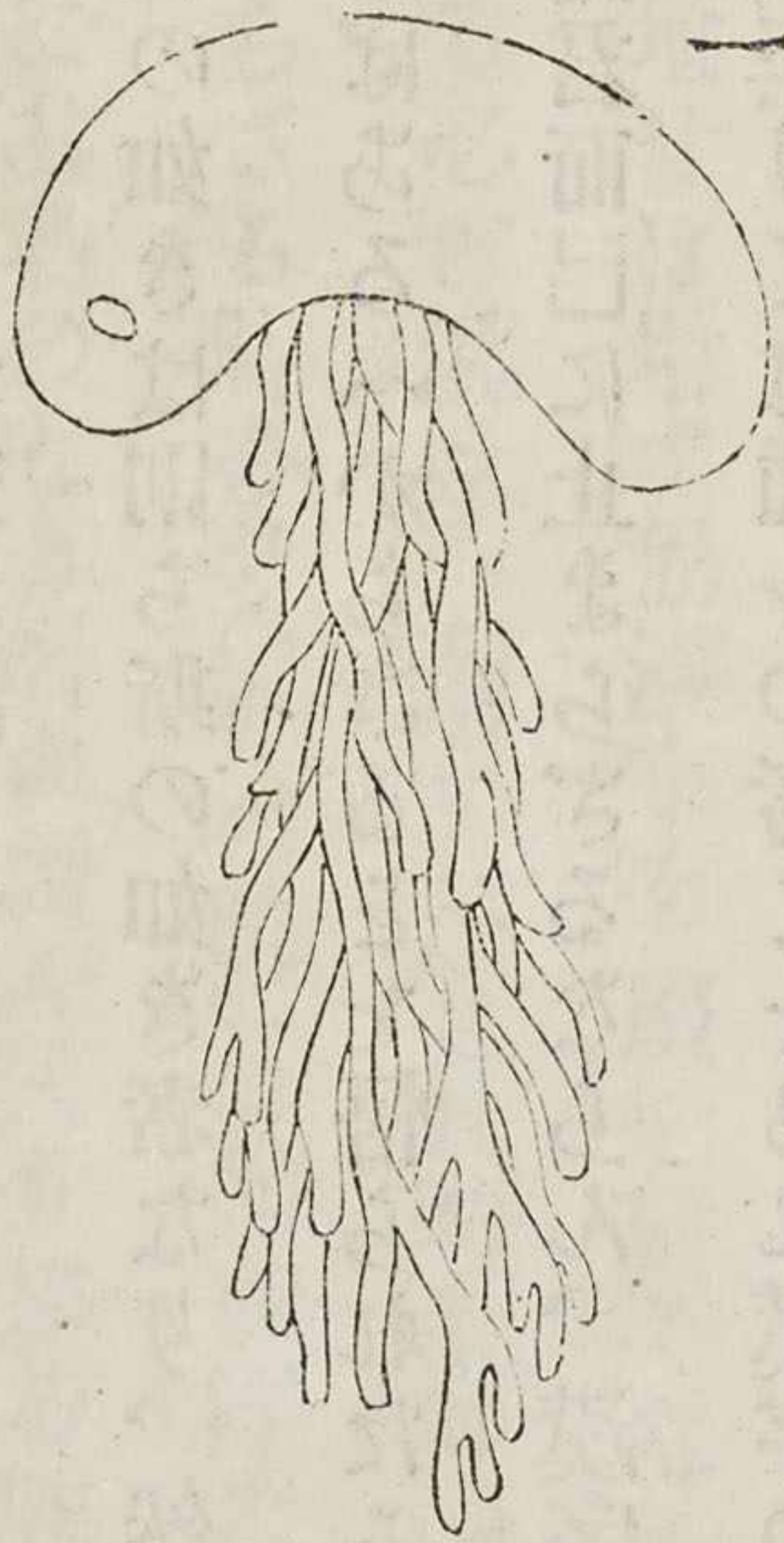
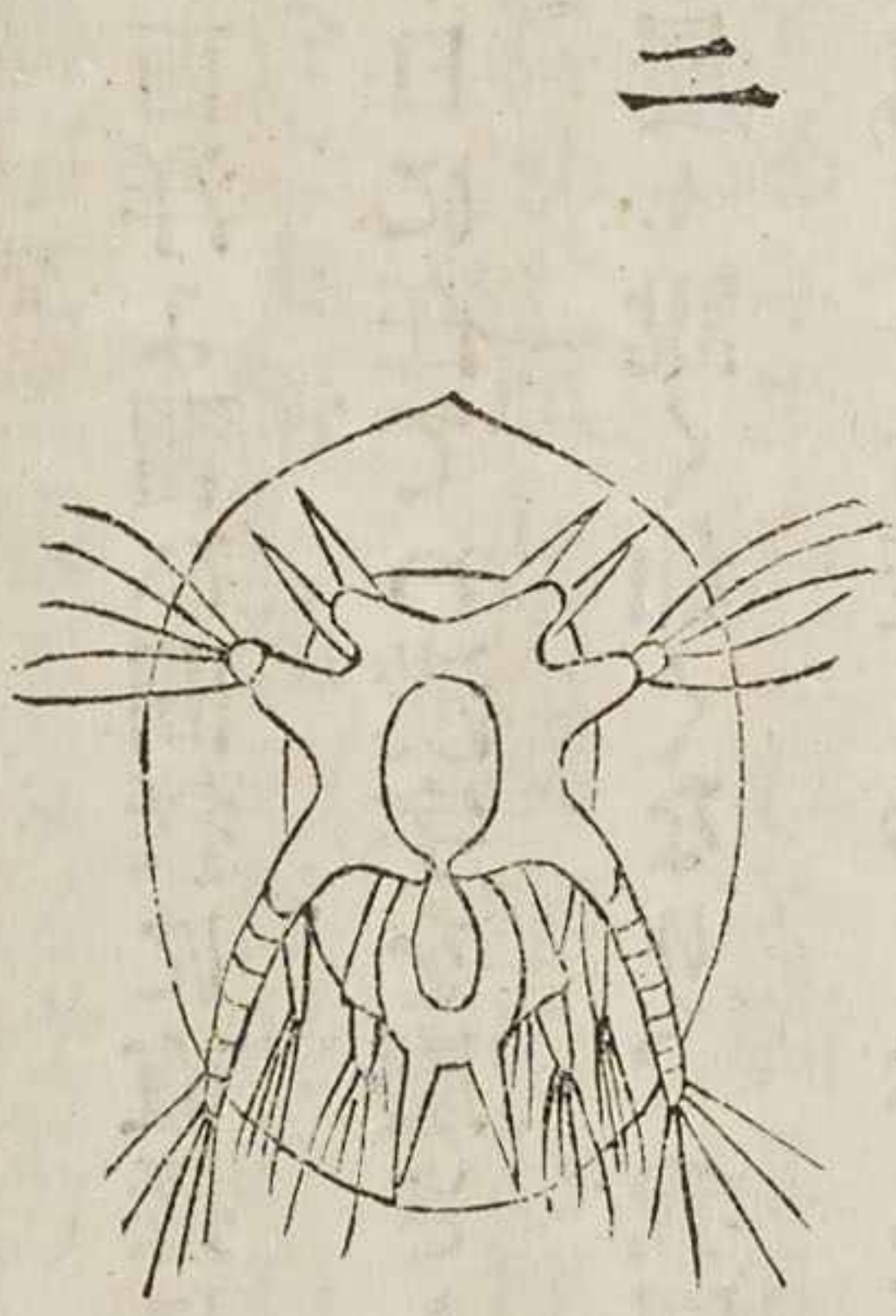
進テ蝦ノ如キ形ニ至リタルトキ止リタル者モアリ更ニ進
 テ蟹トナリテ止リタルモアリ然ルニ蟹及ヒ蝦ノ發生中ニ
 ノープリヤスミジンコノ如キ形ノアルハ其祖先ニ
 此ノ如キ形狀ヲ有シタルモノアリシガ故ニ遺傳ノ法ヲ以
 テ此等ノ種類ノ發生中ニ出現スルナル可シ蟹類ノ現今ノ
 形狀マテ進化シタルハ何萬年ノ星霜ヲ經タルヲナルヤ知
 ラスト雖モ今日蟹一疋ノ卵子ヨリ發生スルノ摸樣ハ此永

キ年月ニ經歷シタルユトヲ略シテ少時ノ間ニ現スナリ發
 生學ハ動物ノ系圖ヲ尋ヌル爲メニ大切ナルヲ推シテ知ル
 可シ尤モ動物ノ發生ハ甲殼類ニ於ケル如ク判然ト其系圖
 ヲ現示セスト雖モ今日動物學者ノ最モ頼ム所ナリ
 今他ノ一二ノ例ヲ舉ケン(第八圖一)ハ北海道小樽産ホヤ
 ト云ヘル動物ナリ其形狀囊ニ似テ口ニツアリ水甲ヨリ入
 リテ乙ヨリ出ツ囊中ニ胃等内部ノ機官アリ此圖ヲ見テ誰
 カ之ヲ有春動物即チ魚又ハ蛙ニ似タル者トナサン併シ其
 發生ヲ檢スルニ經過スル形狀ノ内ニ蛙ノオタマジャクシ
 ニ異ナラヌモノアリ第八圖ニハホヤノオタマジャクシ三
 ハ蛙ノオタマジャクシナリ以テ其相似タルチ知ルニ足ル
 可シ其内部ノ構造ヲ細密ニ研究スレバ其オタリジヤクシ
 ナルヲ疑ヒナシ然レハホヤハ其成長シタルハ有脊動物
 トハ思ヘスト雖モ其發生ヲ見ルハ有脊動物ヨリ下リタ
 ルモノニ相違ナキヲ明瞭ナリ故ニ今日ハホヤノ類ヲ有脊
 動物ノ部ニ入ル、人多シ
 又海岸ノ岩石等ニ附着シタル龜ノ手(第九圖ハ其一種ナ
 リ)ト云ヘル動物アリ先ツ十二八九人ハ介類ナリト云フ

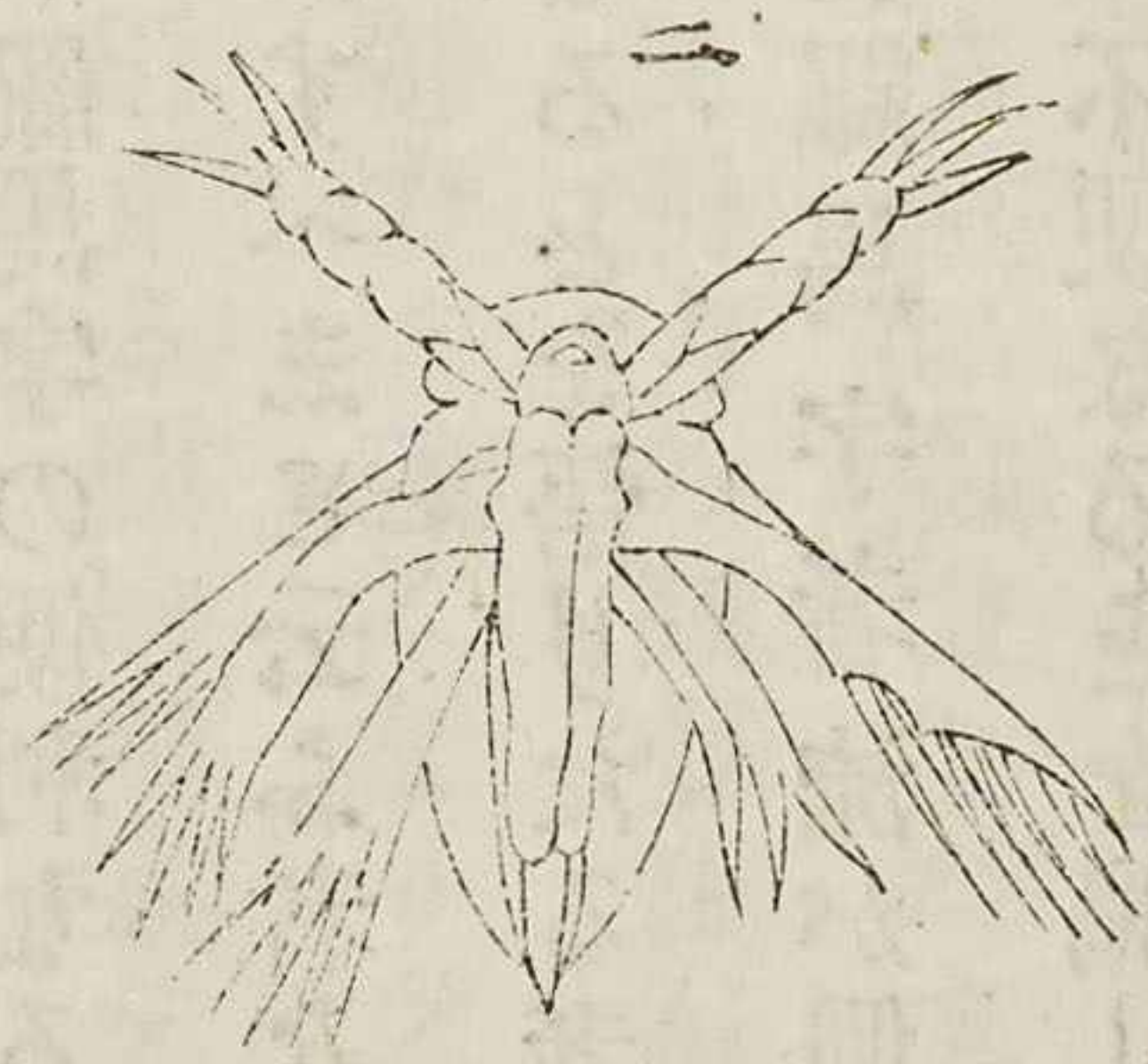
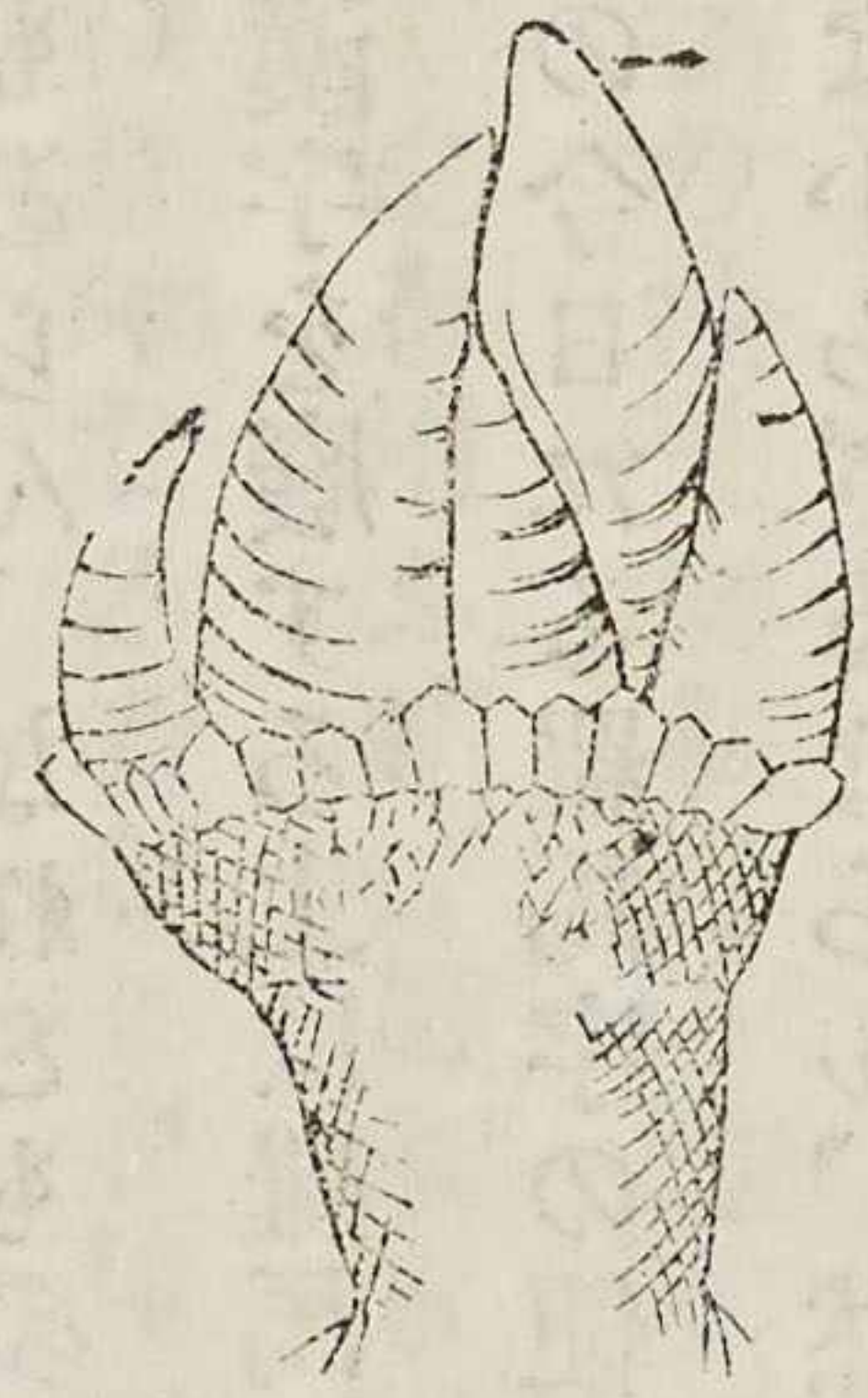
圖八第



圖十第



圖九第



可シ現ニ近頃迄ハ介類ノ内ニ列セラレタリ併シ其發生ヲ見ルニノープリヤス(第九圖二)ヲ經過スルミシンコー蝦等ニ異ナラス故ニ今日ハ此ノ如キ有様ト雖モ甲殼類ト同

シ先祖ヨリ下リタルヲ確實ナリトテ甲殼類ノ一部トナス(第十圖一)ハヤトカリ蟹ニ寄生スル一種ノ奇物ナリ別ニ其構造ト云フベキモノ

形狀マテ進化シタルハ何萬年ノ星霜ヲ經シテハ一ノハシララスト雖モ今日蟹一疋ノ卵子ヨリ發生スルノ摸樣ハ此永

リト云ヘル動物アリ先ツ十二八九人ハ介類ナリト云フ

ナク唯一ノ囊ニシテ其下部ヨリ卵子ノ經多數下リタルモ
 ノナリ此動物ハ何物ナルヤ之ヲ如何ニ分類スヘキヤ其發
 生ナクハ實ニ動物學者ヲシテ困却セシムヘシ然レドモ幸
 ニシテ其發生ヲ見ルニノ一プリヤス(第十圖二)ノ形ヲ經
 過セリ故ニ固ヨリ甲殼類ノ一部ナルヲ判然タリ
 以上述ル所ニテ化石物ヨリ比較解剖ヨリ發生ヨリ動物ノ
 系圖ヲ見出スノ方法稍明ナルヘシ然レモ此ノ如ク三様ノ
 手立アリテ動物ノ系圖ヲ探究スト雖モ恰モ幹ノ全ク埋レ
 テ梢ノミ見ユル木ノ枝プリヲ見ルト等シケレハ其難キヲ
 實ニ云フ可カラス既ニ得タル所少カラスト雖モ進化論ノ
 出シヨリ日尙淺ケレハ未ダ知ル能ハザルヲ事ト比スルモ
 ハ其幾萬分之一ナルヤヲ知ラス然レハ即チ動物學ハ此ノ
 如ク新シキモノナレハ其學者ノ說區々ニシテ一定セサル
 ハ如何トモス可カラス人毎ニ說アルモ怪シムニ足ラス動
 物分類ヲ一定スルハ實ニ今日ノ學問ノ景況ニ於テ爲ス可
 ラザルカ所ナリ人々己ノ最モ可ナリト思フ所ニ從フノ外
 策ナシ歲月移リ學問進ミタラハ學者ノ說ト漸々一致ニ至
 ルヲモアラシカ

羅馬字を主張する者告ぐ 外山正一

百事西洋ヲ習ヒ間接に直接に歐米諸國と競争せねばなら
 ぬ今日に在てハ漢字を廢さんとは何よりの急務なるとは
 余輩屢々説く如くなり、我同胞三千六百萬人中は余輩
 と同感なる者蓋シ尠ながらざるならん、彼の假名の會の
 諸君の如きは則ち斯の如き者なり、然れども漢字の廢さ
 ずんばあるべからざるを悟られたる者は特り假名の會
 の諸君而已に止まらざるならん、漢字ヲ替ふべき字の問
 題に至りては種々の考こそあれ漢字の一日も早く廢さず
 んをあるべからざるを確信するの点に至りては假名
 の會の諸君の外にも之に讓らざる者夥多あるとは余に於
 て疑はざる所なり、斯る輩の中に或は速記法を主張する
 者もあらん、或は朝鮮字杯を以て何より便利なる者と思
 へる者もあらん、なれども多數ハ羅馬字の便利なるを
 を悟り、漢字を廢する上は羅馬字にすべしと云ふ者なら
 ん、開明の今日たる羅馬字の便利なるを悟りたる者は
 固より尠なからざるならん、然るに羅馬字者流が假名
 の會の諸君の如くに團結して漢字の不便なるを鳴し羅

馬字の便利なることを唱へて之を主張するを爲さず又

する者なるが、若し然らざるに於てハ奮起して此勢力に

馬字の便利なることを唱へて之を主張するを爲さず又
 一個人の資格を以ても之を爲す者の尠なきハ余ハ於て遺
 憾に堪へざる所なり、羅馬字者流が袖手傍觀するは國家
 此爲に甚だ歎くべきとなり、今の時たる苟も漢字の不便
 なるを悟りたる者に在りては其假名者流なると羅馬字
 者流なるとに係はらず、一日も躊躇沈黙すべき時にあら
 ざるなり、今の時たる一日も失ふべからざるの時なり、今
 の童兒は我邦將來の命脉のつながる所なり、今の童兒を
 して漢字杯を學ばん爲に貴重なる歲月を浪費せしめん
 は國の安危は甚だ覺束なり、羅馬字者流の如きも假名者
 流同様に團結して漢字の廢さずんばあるべからざるを
 唱へ之を替ふるに羅馬字を以てすべきを主張爲さんと
 は一日もかこたるべからざるなり
 今の有様を見るに上政府の役人より下新聞記者に至るま
 で漢字の奴隷にあらざる者は尠なし漢字の勢ハ實に熾な
 りと云ふべし、羅馬字を主張する者は此勢力に怖れたる
 か將た自然の時の至るを待てと云ふ者なるか果報ハ寢て
 待てと云ふ者なるか開きた口へ牡丹餅の入るを待たんと

する者なるが、若し然らざるに於てハ奮起して此勢力に
 抗すべきなり、躊躇沈黙する者は則ち敵に勢力とかす者
 なり、漢字の性質たる時の經るに隨て勢力の減少せん者
 にあらず、之を用ふれば用ふる程其勢力は強くなり之を
 廢さんとは難くなる者なり、漢字を用ふる間は漢字を以
 て表するには都合よくして他の字にては表するとの難き
 性質の語は益々増加するなり、一語斯の如き語が増せば
 一語だけ漢字を廢さんとは難くなり二語斯の如き語が増
 せば二語だけ漢字を廢さんとは難くなるなり、斯の如き
 語の成る丈尠なき間ハ漢字は廢すべき者あり、斯の如き
 語が増せば増す程漢字を廢し難くなる者なり、蓋し今の
 時たる必ず漢字は廢すべき時なり、今の時は決して失ふ
 べからざる時あり、今の時たる、西洋の事物思想のいまだ
 我邦に其名のなき者の續々入り來る時に於て其名を直に
 採用するハあざれを新し我に於て其名を作らざるを得
 ざるなり、而して漢字の行はるゝ限ハ漢字を以て表する
 に都合よき語を作るは是れ自然の勢なり、則ち假名若く
 は羅馬字にて表するには不便なる語を作るは自然の勢な

り、されば此際に於て漢字を廢さんとは最も願ハしきとなり、是れ則ち羅馬字者流に速ふ奮起せんことを望む所以なり、

漢字の如く多勢の奴隸を有する敵に打勝たんとは實に至難なるとなれば既ふ漢字の不便なるを悟り一日も早く之を廢さんと欲する者は其假名者流なると羅馬字者流なるとの別なく團結一致してよく力を合せて其敵を攻撃せざんをあらざるなり、然るに今の風として假名を主張する者は羅馬字を主張する者を以て輕躁なりとして之を笑ひ羅馬字を主張する者は假名を主張する者を以て迂濶なりとして之を笑はんとする如き有様なり、尙ほ甚だしきは同一く假名と主張する者此中にも假名使杯に關ふて少々の異同を爲すや、ともすると互に張附を爲さんとする如き者に乏しからず、實に不見識の至と云はん胸の狭きと云はん片腹痛きとなり、假名にするも羅馬字にするも漢字を廢したる上となり、未だ漢字を廢するに定りもせぬのに假名でなくてはならぬの羅馬字でなくてはいやだのと争ふ者は兵法を知らざる者と云はざる

べからず、大敵を前にひかへ乍ら戦ふを差置きてまた取もせぬ分取の割前ふ就て爭論する如き者は言語に絶へたる者なり、斯る情實にては敵に勝たんとは固より出來ざるなり、是れ則ち余が羅馬字者流に速に團結せられんと望む所以なり、是れ則ち余が假名者流と羅馬字者流と同心協力して漢字を攻撃せられんことを望む所以なり、是れ則ち余が假名の會の會員なるに係はず羅馬字の會を興さんとに一臂の力を盡さんとする所以なり、

蠶蛆の發育

佐々木忠二郎

古來本邦コテハ養蠶ノ業盛ニ行ハレ各地之ニ從事セザルトコロナク皆ナ能ク之ニ熟達シ年々得ルトコロノ絹絲ハ以テ我カ一產物ヲ爲セリ然レモ蚕兒ニ數種の病害アリテ斃死スルモノ亦尠シトセス是レ常ニ養蠶家及ヒ製種家の大患トナスモノナリ即チ蛆害ノ如キハ其病症ノ最モ甚キモノトス蓋シ一タヒ蚕兒ノ蛆害ヲ受クルハ四眠後繭ヲ營ムコト能ハスシテ死シ或ハ薄繭を營ミ蛹ニ化生スルコト能ハスシテ死シ或ハ厚繭ヲ營ミ蛹ニ化生シテ后チ死シ蛆ハ

蠶蛾ニ代ツテ繭ヲ破リ排出ス故ニ養蠶家及ヒ製種家ノ大

色ヲ帯ビ五個ノ黒キ縦條アリテ縦條間ニハ黒色ノ粗毛ヲ

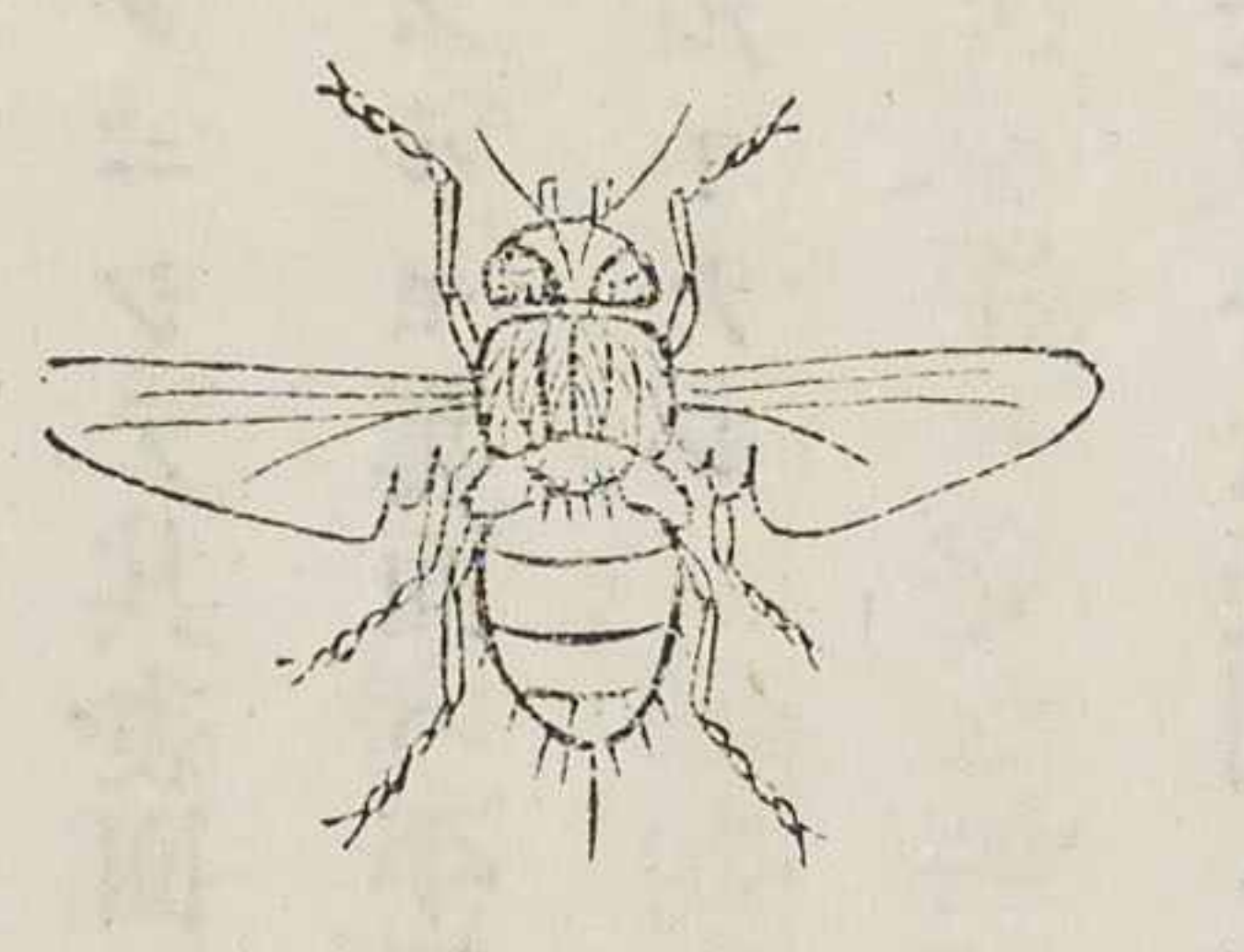
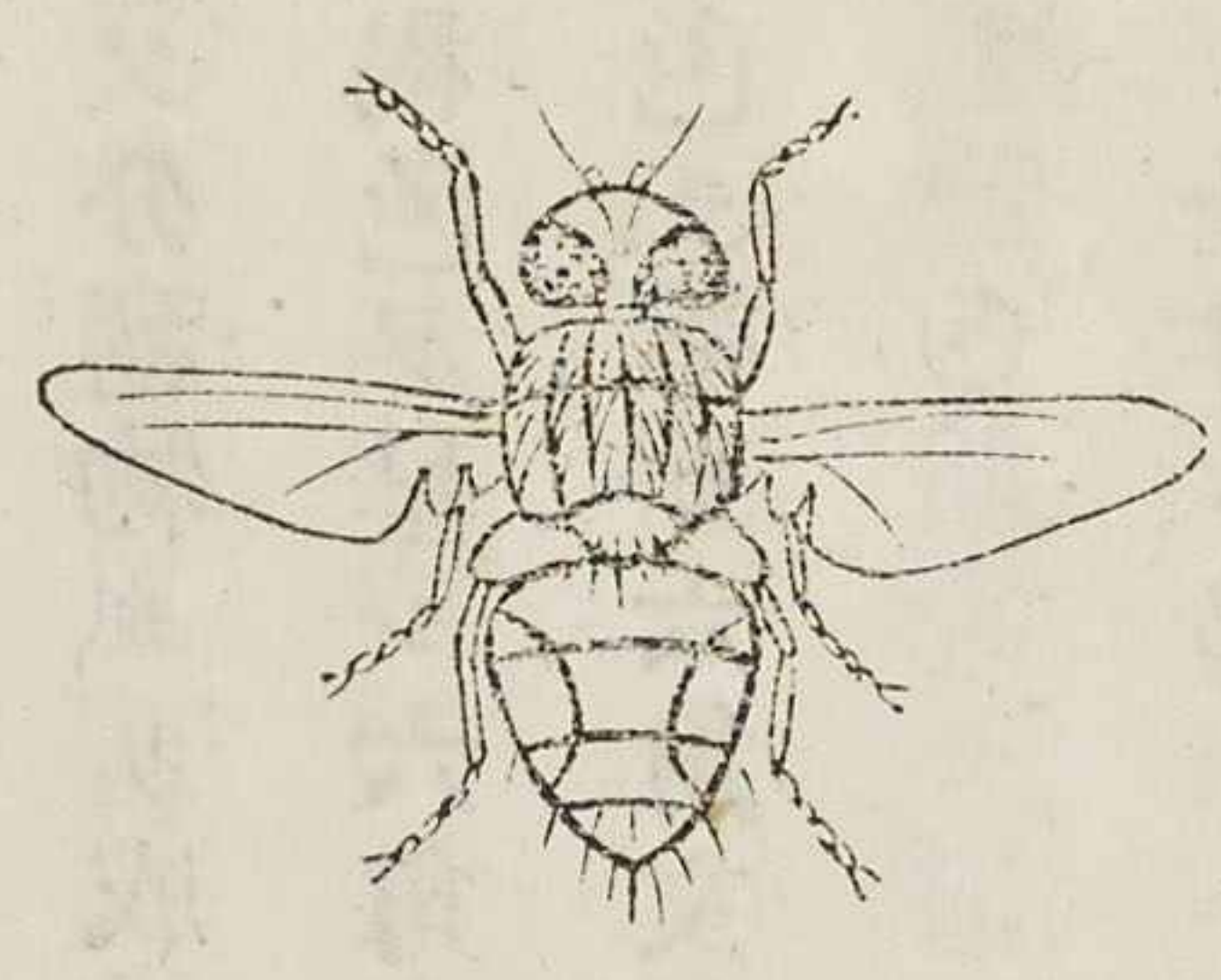
くてはいやだのと争ふ者は兵法を知らざる者と云はざる

蠶蛾ニ代ツテ繭ヲ破リ排出ス故ニ養蠶家及ビ製種家ノ大患タリ然レモ養蠶家ハ徒ニ蠶蛹變シテ蛆ニ化シ或ハ惡桑ヲ蠶兒ニ與ヘタルヨリ蛆ヲ生ズルトノミ信シ且ツ之ヲ防クコトハ遠ク人力ノ及ハザルコト爲シ更ラニ之ガ發育慣習等ヲ親ク研究スルモノ敢テナカリシカ愚父長淳深ク之ヲ憂ヒ如何ニモシテ此蛆害ヲ除カンコトヲ志シ明治七年以來其發育慣習等ヲ實驗シ初メテ蛆ハ蠶兒ノ氣門内ニ棲息スルコトヲ發見シ從テ之ガ豫防法オモ發見セリ其詳細ハ明治十一年刊行勸農局第二回年報及ヒ萬年會第五輯ニ在リ余ハ明治十六年ニ於テ再ビ蚕蛆ノ發育及ヒ蛆ノ蚕兒ニ寄生スル所以ヲ調査シ本年漸ク之ガ調査ヲ終ハリタリ即チ余ノ調査ニ據レバ蚕蛆ノ羽化蟲(蠅)ハ四五月ノ頃ハ發生スルモノニシテ其體軀ハ蒼蠅ヨリ遙ニ肥大ナリ羅旬語ニテ之ヲ *Utschimyia sericaria*, Rond. ト稱フ雄蠅ハ雌蠅ヨリ稍ヤ形大ニシテ長サ五分余翅ヲ擴張スレハ壹寸アリ頭部ハ三角形ニシテ二個ノ複眼ハ濃褐色ヲ呈シ複眼ノ間ダニハ三個ノ單眼ヲ具ヘ又々頭部ノ前端ニハ二個ノ觸角ヲ存シ觸角ニハ一個ノ黒キ組毛ヲ具フ胸部ハ綠黄色ニシテ灰

ハスシテ死シ或ハ厚繭ヲ營ミ蛹ニ化生シテ后チ死シ蛆ハ

色ヲ帶ビ五個ノ黒キ縱條アリテ縱條間ニハ黒色ノ粗毛ヲ縱列ス腹部ハ三角形ニシテ黒色ヲ呈シ其側部ニハ半球狀ノ赤褐色斑ヲ存シ腹部ノ尖端ニモ亦僅少ノ粗毛ヲ生ゼリ雌蠅ハ長ケ雄蠅ヨリ大約形小ナリ適々其長ケ雌蠅ニ均キモノアリト雖モ肥大ナルコトナシ頭部胸部ハ更ニ雄蠅ト特ナルコトナシト雖モ腹部ハ殆ト橢圓形ニシテ其幅ハ雄蠅ノ如ク廣カラズ其色ハ黒クシテ少ク綠黄色ヲ帶ヒ其側部ニハ半球狀ノ赤褐色斑ヲ存スルコトナシ故ニ雌雄少體軀ノ大小ト腹部ノ色ト赤褐色斑ノ有無ニ因テ容易ニ識別スルコトヲ得ベシ雄蠅ノ生殖器ハ睪丸輸精管陰莖等ヨリナリ

睪丸ハ橢圓形ニシテ二數アリ而シテ各睪丸ヨリ伸出セル輸精管ハ后チ相接合シテ一管トナリ陰莖ニ連ナル陰莖ハ細長管ノ狀ヲ爲シ又々陰莖ノ根部ハ黒キ革質ノ鞘ニテ包マレ鞘ハ裂ケテ二個ノ長凸起ニ變シ陰莖ニ接着ス而シテ陰莖ノ上部ニハ黒キ鐵把ノ如キモノアリテ常



睪丸ハ橢圓形ニシテ二數アリ而シテ各睪丸ヨリ

ニ下方ニ彎曲シ陰莖ヲ覆ヒタリ」雌蠅ノ生殖器ハ卵巢受
 精嚢喇叭管陰門等ヨリナリ卵巢ハ二數アリテ各々百八拾
 許ノ白色ノ細長キ軟弱管ヨリナリ每管十二粒内外ノ卵子
 ヲ包藏ス今マ一個ノ卵巢内ノ卵子ヲ算スレバ大約三千以
 上アリ故ニ二個ノ卵巢内ニハ六千粒以上ノ卵子ヲ包藏ス
 抑々此軟弱管ニ一端太クシテ他端細ク常ニ其太キトコロ
 ニテ相接シ喇叭管ニ開キ又タハ細端モ相接着セリ而シテ其
 細端ニハ只タ粒狀質ノ元形質ヲ包藏スルノミナルモ之ヨ
 リ以下喇叭管ニ接スルトコロ迄ニハ十二粒内外ノ卵子ヲ
 包藏ス尤モ軟弱管ノ細端ニ存スル卵子ハ形小ニシ仁ト粒
 狀質ノ元形質トヲ視ルノミナルモ卵子ハ形大ナルニ從テ
 小球狀ノ蛋黃ヲ包藏ス而シテ軟弱管ノ太キトコロ（即チ
 喇叭管ニ接スルトコロ）ニ存スル卵子ハ尤モ形大ニシテ
 一種ノ薄キ白殼ヲ被ムリ殼面ニハ六角形ノ斑文ヲ存セリ
 又タ喇叭管ノ上部ニハ三個ノ受精嚢ト二個ノ細長嚢ヲ具
 ヘ尚ホ喇叭管ノ下部ハ褐色ヲ帶ヒタル數多ノ細長キ匾條
 ノ如キモノヲ具フ受精嚢ハ透明ナル細管ヨリナリテ其遊
 離端ニハ褐色ノ圓嚢ヲ具フ而シテ卵子卵嚢ヲ辭シ喇叭管

ニ下レバ即チ受精嚢ニ蓄藏セル精虫ヲ受ケテ成熟シ粘膠
 質ニテ包マル蓋シ此精膠質ハ二個ノ細長嚢ノ分泌スルモ
 ノナラン是時卵子ハ淡黃色ヲ呈ス卵子喇叭管ノ下部ニ下
 レバ再ヒ一種ノ殼ニ包マル此殼ハ即チ褐色ヲ帶ヒタル匾
 條ノ分泌物ヨリ成ルガ如クニシテ其表面ハ膨起シテ厚ク
 黒褐色ヲ呈シ六角文ヲ存スルモ裏面ハ平扁ニシテ薄ク黃
 褐色ヲ帶ビ六角文ヲ存スルヲナシ

○ 社會ニ起レル人爲淘汰ノ一大疑問ニ答フ

在札幌 一 寒 生

士巴爾答人及ヒ北亞米利加洲ノ或ル土人ハ外寇ノ侵入セ
 シ時ニ方テ能ク之ヲ防禦シテ絶滅スルコトヲ免レシハ全ク
 殺兒ノ法其社會ニ行ハレタルカ故ニシテ体格不具ノ生兒
 ハ之ヲ殺害シ強壯ノ子孫ノミチ養育シ社會一般人民ノ健
 康ヲ保チ體質孱弱ナル者ノ播殖ヲ碍ゲタル一種ノ人爲淘
 汰ノ功能ナリ然ルニ近今醫學大ニ開進スルニ從ヒ反對ノ
 淘汰起リ鍼灸藥餌ノ力ヲ以テ患者ノ病勢ヲ緩フシ強テ社
 會ニ生存スルノ期ヲ延長シ此等体格羸弱ノ人民ヲシテ其

病質ヲ子孫後裔ニ遺傳スルコト多カラシメ反テ社會ノ有

就テ異說ナキニモ非ス依テ聊カ淺學ヲ顧ズ加藤先生ノ疑

離端ニハ褐色ノ圓囊ヲ具フ而シテ卵子卵囊ヲ辭シ喇叭管

會ニ生存スルノ期ヲ延長シ此等体格羸弱ノ人民ヲシテ其

病質ヲ子孫後裔ニ遺傳スルコト多カラシメ反テ社會ノ有害物ヲ増スハ文明ノ一大得害ナリトノ說ハ彼ノ有名ナル獨逸ノ生物學博士黑科耳氏カ世ニ公ニスル所ノ者ナリト云フ氏カ此說ハ單ニ生物學上ハ爲淘汰法ノ點ヨリ論ジタルモノニテ一理ナキニシモアラズト雖モ若シ世人カ如此キ一科學ノ一歸結ヲ以テ樞雜纏繞思議ス可ラサル社會ノ動行ヲ制セント欲セバ病ヲ救フニ毒藥ヲ以テスルト一般僅少モ功益ヲ見ル能ハザルノミナラズ大害ヲ喚キ起スマ疑テ容レサルナリ蓋シ人間社會ノ現象ハ萬有ノ現象中最モ繁雜ノ者ニシテ單純ノ原因ヨリ起ルヲ至テ稀ニ必ス數多ノ元由ヲ抱維スルヲ以テ苟モ其働行ヲ管理スル所ノ規律ヲ發見セント欲セハ必ス先ツ茲ニ注意セザル可ラズサレハ野蠻社會ノ小部落ニ行ハレテ細少ノ利益アリシモノ決シテ近世ノ文明社會ニ福祉ヲ與フベキモノニ非サルハ理ノ最モ賭易キ事ニシテ黑科耳氏カ殺兒ノ法ヲ美ニシ醫學進步ヨリ起レル人爲淘汰ヲ有害視スルハ只ニ生物學上ノ一歸結ニシテ此カ爲ニ立法及ヒ行政上ニ差シタル風動モアラザルベケレバ空ク看過スルモ可ナリト雖モ此點ニ

就テ異說ナキニモ非ス依テ聊カ淺學ヲ顧ズ加藤先生ノ疑問ニ答ント欲スルナリ
殺兒ノ法ハ往昔不文ノ時代ニ於テ野蠻人ノ中ニ往々行ハレタル法ニシテ羅馬希臘ニモ又々如此キ習慣アリシカハ布拉多、亞里斯度德等ノ碩學天理人道ニ背クヲ痛論セシコトアリキ士巴爾答ノ法ハ一兒ヲ舉グル毎ニ其父タル者之ヲ社會ノ長者ニ示シ綿密ノ試察ヲ乞フ而シテ長者ハ四肢直整外貌爽壯ト認ムルハ即チ養育セシメ若シ体格軟弱ニシテ不具或ハ病身ノ徵アレハ養フコトヲ許サズシテタエーゲス山ノ深窄ニ投棄セシムルノ嚴法ナリシカ故ニ產婦ハ飲食ヲ慎ミ身體ヲ養生シ爭テ強壯ノ兒子ヲ舉ケンコトヲ勉メ此カ爲メ人民ハ次第ニ強健勇壯ノモノ、ミトナリ其勢四隣無比トナレリト其ノ他希臘共和邦ニ於テモ又如此キ風習ノ在リシコトハ古史ニ徵シテ知ル可キナリ當時ハ殺兒ノ法殆ント跡ヲ開明世界ニ絶ツト雖モ文盲無智ノ野蠻人ノ中ニハ間々行ハル、者ノ如シ乃チ南米達斯山ノ近傍ユウカヤリニ住スル蕃屬并ニ大洋州ノフィシアン等ハ現ニ軟弱ナル初生兒ヲ殺害スルノ法ヲ實行ス蓋

シ此等ノ蕃民カ殺見ノ法ヲ實行スルノ目的ハ大略左ノ四
因ニ外ナラザルヘシ

第一勇狀ノ人民ヲ増シ外敵ノ侵入ヲ防禦セントスル

ニ出ル

第二食物ノ飲乏ニ出ル

第三邪教ノ惑溺ヨリ殺見ノ風習ヲ實行スル

第四母親一時ノ怒ニ乘シ子女ヲ擣殺スルコト

邪教ノ惑溺ヨリ殺見ノ法ヲ行ヒ(マホメット宗ヲ奉スル人
民及ヒヲジュプット人ニ長女一人ヲ殘シ他ノ女子ヲ殺害
スルノ惡風習アリ)或ハ一時ノ怒ニ乘シ兒子ヲ擣殺スル
カ如キハ(此ノ原因ハ著キ結果ヲ生セザルガ加ク見ユレ
トモフイシアンノ中ニ盛ニ行ハル法ニテ爲ニ人口ヲ減ス
ルコト想像外ナリト)大害ヲ社會一流シ大ニ日進開運ノ
路ヲ阻碍スルヤ論ヲ待タサル可シト雖モ第一第二ノ原因
ノ如ク勇壯豪邁ノ子孫ヲ繁殖セント欲シ或ハ衣食ノ飲乏
ヨリ己ムヲ得ス孱弱ノ子孫ヲ棄テ、壯健ノ者ノミヲ養育
スルノ人爲淘汰ハ外界萬事ノ感應ヲ緩クシ虎狼嚙優勝
劣敗ノ修維場ニ於テ社會ノ保存ヲ補助スルコト少ナカラザ

ルベシト思ハルレハ余ハ左ニ其利害得失ヲ論ゼント欲ス
野蠻人民カ外邦ノ勁敵ニ抗抵シ自己ノ部落ヲ保存營衛ス
ルニ方リ固ヨリ現時ノ開明諸邦ニ行ハル、ガ如キ完全ナ
ル兵制ノ存在スルコトナケレハ各自戎衣ヲ被リ劍戟ヲ携
帶シテ外寇ノ侵入ヲ阻止セザルチ得ズサレハ文明各國ノ
未タ草昧ノ域ヲ脱セサル前ノ古制ニモ其例ヲ見ル如ク分
業貿易ノ法未ク創立スルコトナク衣食不充分ニシテ活路困
難ナル時代ニ在テハ現時ノ徵兵法ヲ實行シテ常備ノ兵員
ヲ養生スルノ餘裕ナキコト勿論ニシテ一朝事ノ起ルアレハ
農者ハ鋤鋤ヲ投シ獵者ハ弓矢ヲ捨テ、兵戎ニ從ニ方リ衣
食ハ他人人民ニ依頼スルコトナク自身ニ供給セザルベカラザ
レハ體質羸弱ノ者豈ニ此ノ勞働ニ堪ユベケンヤ是レ或ル
部落ニ殺見法ノ如キ一種ノ人爲淘汰ヲ現出セル所以ナリ
而シテ此ノ淘汰法ハ軍制ヨリ興ルコトナレハ軍制淘汰ト稱
スルモ不可ナカルヘシ漢書評林第九十四卷ニ匈奴傳アリ
其辭ニ曰ク「匈奴其先夏后氏之苗曰淳維唐虞以上有山戎
獫狁粥居于北邊隨草畜牧而轉移(中略)逐水草遷徙無城
郭常居耕田之業(中略)兒能騎羊引弓射鳥鼠小長則射狐菟

肉食士力能彎弓盡爲甲騎其俗寬則隨畜田獵禽獸爲生業急

伐ヲ習ヒ飽マテ勇氣ヲ鼓舞聲勵セシカハ標悍豪邁固ヨリ

劣敗ノ修維場ニ於テ社會ノ保存ヲ補助スルコト少ナカラザ

郭常居耕田之業(中略)兒能騎羊引弓射鳥鼠小長則射狐菟

肉食士力能彎弓盡爲甲騎其俗寬則隨畜田獵禽獸爲生業急
 則人習戰攻以侵代其天性也其長兵則弓矢短兵則刀鋌利則
 進不利則退不差遁走苟利所在不知禮義自君王以咸食畜衣
 其皮革被蓆裘壯者食肥美老者飲食其余貴壯健賤老弱云
 々等ノ數言ニ就テ判定スルニ北米印度人ノ某部落及ヒ士
 巴爾答人ノ如ク殺兒ノ法ニ因テ勇猛豪邁ノ氣風ヲ増セシ
 ニ非スト雖モ「壯者食肥美」以下ノ語ニテ軍制淘汰ノ行ハ
 レタルヲ照々トシテ明カナリ蓋シ第三ノ原因ヨリ兒子ヲ
 殺スノ目的ハ元ト軍制淘汰ニ外ナラザレハ既ニ匈奴ノ内
 ニモ同法ノ行ハル、以上ハ其手段ニ於テ少シク異ル所ア
 リト雖_レ後ノ結果實効ニ至テハ同シカラザル可カラズ且
 「隨草畜牧而轉移」云々及ヒ「兒能騎羊引弓射鳥鼠」云々
 ノ語ニ由テ匈奴收ノ風俗_{北南}米印度人及ヒフィジアン等ノ野
 蠻人ト比シテ大同小異ナルヲ知ルヲ以テ其後運ニ就テ軍
 制淘汰ノ實行アル他種屬ノ運命ヲ演釋說明スルコト愈々不
 可ナキヲ信スレハ左ノ陳述ヲ待テ殺兒法ヨリ來ル軍制淘
 汰ノ利益アルヲ知レ

伐ヲ習ヒ飽マテ勇氣ヲ鼓舞獎勵セシカハ慄悍豪邁固ヨリ
 其分ニシテ邊境ノ支那人ヲ掠奪シテ少シモ憚ル所ナカリ
 キ故ニ周ノ武王ヨリ以下穆王懿王ヲ經テ春秋戰國ニ至ル
 迄歷代ノ帝王屢々此等ノ野民ヲ攻伐シ北邊ノ住民ヲシテ
 其侵掠ニ遭遇セサラシメント欲セシカト遂ニ征服セシム
 ルコト能ハザリシ而シテ漢ノ高祖ノ時ニハ匈奴勢稍大トナリ
 加之ナラス土地險ニシテ容易ニ平定スルコト至テ難事ナリ
 シヲ以テ已テ得ス「從其言約結知親賂遺單于(匈奴ノ酋長)
 以救邊境孝惠高后時遵而不違匈奴寇盜不爲哀止而單于
 及以加驕倨(廼爲書使使遺高后曰孤債之君生於沮澤之中
 長於平野午馬之域數至邊境願遊中國階下獨立孤債獨居
 兩王不樂無以自虞願以所有易其所無)逮至孤文與關市妻
 以漢女增厚其賂歲以千金(漢書評林九十四)「カク大國ノ
 君王モ僅ニ邊境ノ一部落ヲ畏懼シ變心常ナク信スルニ足
 ラザル蕃民ヲ漢女ヲ以テ妻ハシ或ハ千金ノ賂ヲ遺リ驕倨
 ヲ加フルモ敢テ問罪ノ師ヲ派遣スルコトナク僅ニ和親ヲ得
 テ其侵掠ヲ免カレントセシ窮策ハ中國ノ武威四隣ニ及ハ
 サルノ致ス所ナリト雖モ重大ノ元由ハ軍制淘汰ノ適度ニ

行ハレタルヨリ匈奴ノ氣象勇壯豪邁トナリシ故ナリ

○

九谷窯磁器

小藤 文次郎

沿革

石川縣下加賀國江沼郡西南隅山中ニ九ヶノ谷アリ最南ノ谷ニ村落アリ九谷村ト云フ今ヲ距ルコト三百三十年天文弘治年間(西曆一千五百五十年代)陶土ヲ該村ニ取リ以テ器物ヲ創造セリト、因テ其器ニ冒スニ九谷ノ名ヲ以テスト云フ、或人曰ク藩主前田利治同村内字村ノ下ト稱セル所ニ南京磁器ニ使用セル同質ノ珪石ヲ發見シ田村權左衛門ニ命シテ製陶セシメタリト、陶器製造創始記ニ曰ク田村某ハ肥前窯ノ製法ヲ傳習セシカ如シ今世ニ傳フル所ノ古九谷磁器ヲ按スルニ青華紅綠ニシテ支那陶器ニ類似スルヲ見レバ田村氏ハ肥前ノ五郎太輔祥瑞ノ支那ヨリ傳來セシ製法ヲ傳用セシニ疑ヒナシ、爾後漸次進歩シテ濃綠淡紫純黃ノ釉藥ヲ用ウルニ至ル、其間大隅守影加賀國ニ遊ヒ妙趣ノ画意ヲ器面ニ施セシヲ以テ九谷燒ノ名汎ク世ニ知ラレタリ、明曆ノ頃西曆(一千六百五十年代)前田利明、

後藤才治郎ナルモノヲ肥前唐津ニ遣シ陶工ヲ傳習セシム

此ニ於テ其伎大ニ備リ彩紅ノ画工旺盛ニ赴キ髹漆画磁器

ノ艷麗精巧ナルモノヲ多ク製造セリ、其後九谷窯衰頽シ

殆ト廢絶セシテ文化七年(西曆一千八百十年)大聖寺町商

吉田屋傳右衛門其業ヲ中興シ青繪ヲ描キ交趾燒ヲ摸擬ス

全十一年窯ヲ山代村(江沼郡)一村大聖寺町ヲ距ル東南

一里余)ニ開キ珪石ハ尙ホ九谷村ヨリ運搬ス、画工飯田屋

八郎右衛門唐土ノ画譜ヲ得テヨリ繪様一變シ專ラ赤繪ヲ

描キ伎モ亦精密トナリ四十年前画工莊三、守影ノ画様彩

紅ノ遺致ヲ搜索シ復タ画風ノ中興ヲ致ス、爾來金澤、寺井、

小松、大聖寺等ニ開窯スルモノ數十ニ至レリ画工、陶工ト

俱ニ高尙ヲ極メ産出モ日ニ月ニ旺盛ニ赴キ外人多ク之ヲ

購求シ珍愛セリ

原質

九谷磁器ニ二種ノ別アリ一ツハ加賀國江沼郡山代村等ニテ燒成シ、一ツハ同國能美郡若杉村等ニテ製造ス、江沼郡ノ磁器ハ真正ノ九谷磁器ニテ其質甚タ固實、色雪白ニシテ且半透明ナリ稍尾張美濃窯ニ類似ス、能美郡ノ磁器ハ

之ニ反シ稍脆弱ニシテ堅實ナラス、黄色ヲ帶ヒ又不透明

原質堅牢ナルモノハ水確ニテ舂碎シ細末トナシ粗糲ニテ

知ラレタリ、明曆ノ頃西曆(一千六百五十年代)前田利明、

テ且半透明ナリ稍尾張美濃窯ニ類似ス、能美郡ノ磁器ハ

之ニ反シ稍脆弱ニシテ堅實ナラス、黄色ヲ帶ヒ又不透明
ナリ、故ニ尋常土焼ニ伯仲ス、現今汎ク九谷窯トシテ世ニ
販賣セルモノハ即チ該種ニ屬ス蓋シ真正ノ九谷窯ハ其質
美ハ美ナリト雖モ原質ヲ遠隔ノ地ニ仰ケルヲ以テ製品ノ
價賤カラス、故ニ能美郡磁器ノ産額ニ遠ク及ハサルナリ、
今茲ニ兩種原質ノ配分ヲ示ス左ノ如シ

真正九谷窯磁器

原質ハ加賀國江沼郡新谷村全能美郡五國寺村鍋谷村等ヨ
リ産出セル陶土ヲ使用ス調合ハ左ニ示ス如シ

新谷村土或ハ九谷村土五分

五國寺村土 五分

鍋谷村土 二分

能美郡窯磁器

原質大略前ニ全シ左ニ調合ヲ示ス

鍋谷村土 三分

五國寺村土 七分

若杉村土 三分

原質準備

原質堅牢ナルモノハ水確ニテ舂碎シ細末トナシ粗糲ニテ

濾淘シ復タ礪礪シ絹羅ニ過シ之ヲ猫田仕掛ニテ淘汰シ以

テ各原質ノ泥漿ヲ裂シ前ニ記載セル調合法ニ從ヒ和合シ

大槽ニ移シ之ニテ沈淀セシム而シテ護謨管ヲ以テ上澄ヲ

吸去ラシメ竹ヲ以テ一間平方ノ圍ヲ作り内部ヨリ蓆ヲ釘

緊シ泥漿ヲ移入レ水分ヲ滲出セシム

造坏並索燒法

精製ノ陶土ヲ少シク乾カシ捏シテ磚トナシ輪車ニ載セ造

坏ス、其法方ハ樂燒其他一般ノ製造方ト大同小異ナルヲ

以テ爰ニ贅セス

坏ヲ陽乾スル大凡五日間既ニ乾燥スレハ窯ニ入レ十時間

ニテ素燒ス薪ハ松片五貫目消費ス

窯

本縣ノ窯ハ尋常登窯ト稱スルモノニテ用材ハ耐火粘土ノ

磚ヲ以テ造リ珪質粘土ヲ以テ固膠セシメシモノナリ今茲

ニ同縣勸業課ノ窯寸法ヲ示ス其構造ハ

大ニ横幅 十尺

本ニ奥行 三尺六寸

高サ 五尺五寸

高配 一尺ニ付三寸強

火爐橫幅 一間五尺

奥行キ 四尺三寸

高サ 五尺五寸

釉藥

眞正九谷磁器釉藥ハ九谷石壹斗、柞灰六升ヲ配合ス、勸業課ニテハ肥前天草石壹斗、柞灰四合五勺ヲ混ス、能美郡九谷磁器釉藥ハ佐野石七分、柞灰二分ナリ、釉藥石質ハ多ク珪質ナレハ極メテ堅牢ニテ之ヲ水碓ニ舂碎シ氣飛シテ細末トナシ前ニ記載セシ如ク配合シ柞灰ヲ加ヘ水ニ和シ釉藥ト爲ス

本燒

前ニ記セル如ク杯ヲ拉シ素燒シ支那燒青ヲ礮碾シ細末トナシ水ヲ和シ之ヲ以畫染シ而シテ器ヲ釉藥ニ蘸シ乾カシ空足下ノ釉藥ヲ剝キ伊吹山石ニ海蘿汁ヲ和シ之ヲ塗リ而シテ圓形ノ臺ニ載セ又匣鉢ニ入レ窯中ニ積ミ赤松片凡千五百貫目ヲ燃キ一窯二十四間ニ燒成ス、色見ヨリ器物見

本ヲ入レ長キ鉄鉢ヲ以テ時々取出シ成否ヲ視テ燒成セハ火ヲ止ム、燒成ノ時間ニ遲速アリト知ルヘシ、陶磁器ハ燒方ニ大ニ巧拙アリ故ニ火夫ハ其俸給厚シ、窯中ニ松片投入ノ方宜シキヲ得サレハ一隅ハ火氣充分ナルモ一隅ニハ火氣通セス、一方ノ磁器ハ燒成セルモ他ノ磁器ニハ火徹セス、斯ク窯内火氣一齋ニ流通セサルヨリ器物ヲ燒損スルコト多シ、若シ火度過ルルハ燒青流レ器苦鹹ス、火度足ラサレハ燒青ノ畫染發現セス、燒窯ノ秘訣ハ人々ノ經驗ニアリ、

戩金及彩畫着色法

器物燒成ル後チ赤酸化鉄或ハ酸化滿俺チ以テ畫ヲ鈎勒シ綿窯ニ入ル、綿窯ニ内外ノ圍アリ外圍ハ尋常ノ窯ノ如ク泥土チ以テ作り燒成ス又素燒ノ瓦板ヲ窯ノ内部ニ附着セシム蓋シ火氣ヲ窯内ニ均シク通セシムル爲ナリ又窯底ノ中央ニ壹個ノ臺アリ内窯ヲ此上ニ載セ内窯ハ素燒ノ瓶ナリ蓋ヲ備フ蓋ニ色見穴アリ火度ノ如何ヲ觀察スヘシ窯ノ内部ニ二個ノ素燒輪アリ之ニ素燒板大凡七八枚一寸許ヲ隔テ輪ノ上ニ横ヘ架セシム其上ニ燒ク可キ器物ヲ載ス此

ノ窯モ大凡六時間燒キ而シテ窯ヨリ出シ金粉等ヲ以テ裝

右四品チ大凡二十五時間乳鉢ニテ研磨シ後使用ス

五百貫目ヲ燃キ一窯二十四間ニ燒成ス、色見ヨリ器物見

隔テ輪ノ上ニ横へ架セシム其上ニ燒ク可キ器物ヲ載ス此

ノ窯モ大凡六時間燒キ而シテ窯ヨリ出シ金粉等ヲ以テ裝色シ又窯ニ入レ燒成ス然ル後器牧ヲ出シ初メ米糠ニテ磨キ再ヒ瑪瑙ニテ楷磨シ又柔皮片ヲ以テ拭フナリ、右裝色ニ用フル赤色料調合法ハ左ノ如シ

玻璃末 鉛質 二十四匁

礬紅 赤酸 十一匁

鉛華 炭酸 七匁

珪土 酸化 五匁

右四品ヲ調和シ乳鉢ニテ大凡九十六時間研磨シ屢器物ニ着色シ燒キ色ノ淡濃ヲ試ム、然レモ運筆ノ巧拙ニ因リ同調合ノ物料ト雖モ色澤ノ差アリ又金襴手赤色ト稱スルハ礬紅過量ヲ如フ故ニ少シク黑色ヲ帶フ、然レモ器物ニ好ク着色スト云フ

青色調合法

玻璃 鉛質 十匁

鉛華 九匁

綠青 炭酸 五匁

唐白目 安質母尼 七匁

右四品ヲ大凡二十五時間乳鉢ニテ研磨シ後使用ス

黃色合調法

玻璃 鉛質 十匁

礬紅 七匁

鉛華 八匁

摺方前ニ全シ

紺青色調合法

玻璃 鉛質 三匁七分

紺青 スモルト 三匁

鉛華 六匁二分

摺方前ニ全シ

臘脂色調合法

玻璃 鉛質 十一匁

鉛華 九匁

珪土 五匁

金屑 四匁

右四品ヲ大凡五十時間磨碎シ裝色方ハ秘訣アリ又着色人ニ因テ其方法異ナレハ爰ニ叙事シ難シ

白色調合法

玻璃 鉛質

五匁五分

珪土

五匁

鉛華

五匁

白繪

五匁

右四品大凡十五時間磨碎シテ而シテ使用ス

黑色調合法

玻璃 鉛質

十匁

支那燒青

五匁

珪土

十二匁

支那土

五匁

白繪

五匁

研方前ニ全シ

器物ニ樹本等ヲ描カントセハ能登國羽咋郡火打谷村ヨリ
出ル酸化滿俺ヲ金澤ニテ精製セシ壹品ヲ粉末トナシ鈎勒
ニ用ユ金箔壹匁ヲ五十時間研キ赤色ノ上ニ樹木枝葉等ノ
細微ナル彩色ニ施用ス、合セ金ト稱スル者ハ金末壹匁
砂七厘ヲ混和シ、白地器ニ着色スル時ニ施用ス、蓋シ單ニ

金箔ノミニテハ白地ニ着色シ難キヲ以テ礬砂ヲ和ス、着

色ニハ渾テ鹿毫筆ヲ以テセリ石川縣下ニ著明ナル九谷磁

器ハ素質ノ善良ナルニ非スシテ赤丹ニ金色着色精巧ナル

ニアリ、白地ノ如キハ尾張國瀬戸村其他ヨリ輸入スル者

少ナカラス、要スルニ着色ノミヲ專業トセルカ如シ(彩色

ノ如キハ人々ノ工夫ニ因リ一樣ナラス又画法モ門派ヲ異

ニス、今加賀國着色工ノ著明ナルモノヲ舉クルニ大聖寺

春名繁春ハ北風齋ヲ學ヒ、海内吉藏(松冷堂)ハ狩野ノ門派

ニ出テ、粟生村開匠軒ハ翠北流ノ画ヲ寫シ、金澤區淺井幸

八ハ古九豆画工守影ノ流ヲ摸シ、寺井村松屋某(松雪堂)並

ニ某庄三等モ畫工ニ有名ニシテ畫風亦異様ナリ

老子ヲ駁ス

寺山敬之助 稿

古來支那ノ學者ヲ以テ任スルモノ皆ナ古ノ制度人情ヲ賞

賛シテ明リニ後世ヲ輕蔑視シ斯民ヲ濟ハントセハ古法ヲ

摸倣スルノ外ナシト思察シ強テ規矩ヲ古世ニ採ラント欲

ス笑フヘキナリソレ社會ハ活動物ニアラスヤ終始變遷シ

テ而シテ改進スルモノニアラスヤ社會已ニ然ラハ社會ヲ

組織スル各人箇ニ於テ亦此ノ如クナラサルヘカラスギ

グー氏曰ク改進ハ人性ノ固然ナレハ宜ク將來ヲ期望シテ

ヲ興起ス縷々八十一章五千言ヲ述ヘテ無爲ノ効ヲ説ク所

グー氏曰ク改進ハ人性ノ固然ナレハ宜ク將來ヲ期望シテ
 勇進スヘシ既往ヲ追悼シテ退歩スヘカラスト社會ノ改進
 ハ速ニシテ明ナリ昨日無上ノ良法タルモ今日不用ノ長物
 タリ今日堯舜タルモ明日盜跖タルヲ保スヘカラスト古制美
 ナリイトヘトモ摸擬スヘキニアラス今文拙ナリトイヘト
 モ人力ノ得テ削去スヘキニアラス陷習ヲ蟬脫シテ華風ノ
 域ニス、ム是ヲ世潮ノ進化トイフ世潮ノ進化ハ夫レ沛然
 トシテ禦クヘカラスト苟モコレニ乖戾セントセハ勞シテ功
 ナキノミナラス世上ニ暴波怒濤ヲ生セントス眼ヲ轉シテ
 宇宙ノ構造ヲ視ヨ我々ノ棲息スル地球ハ日夜運轉シテ止
 ナキニアラスヤ春咲キ夏茂リ秋實リ冬萎ム四時ノ秩序整
 然トシテ正キニアラスヤ自然ノ進化法ソレ妨クヘカラスト
 人世ノ化醇律獨リ防遏スルヲ得ンヤ然リ而シテ支那ノ學
 者輩ハコノ不可易ノ真理ヲ知ラス迷夢ノ範圍内ニ彷徨シ
 テ社會ヲ左右セント欲ス猶ホ影ヲ見テコレヲ執ヘントス
 ルカ如ク愈々追テ遠カラントス是ニ於テ憤懣シテ古ヲ褒
 シ今ヲ抑シ以テ己カ鬱憤ヲ慰セントス亦愚ナラスヤ
 春秋ノ世ニ老聃ナルモノアリ才學一世ヲ籠絡シ立說一派

ヲ興起ス縷々八十一章五千言ヲ述ヘテ無爲ノ効ヲ説ク所
 謂道學ノ鼻祖ニシテ儒派ノ鬼蜮視スルトコロナリ然レモ
 ツノ著書ヲ閱ミスルニ徹頭徹尾谷神ノ妙ヲ説キ無爲不言
 ノ教ヨリ他ニ濟世ノ策ナシト思惟シ大ニ論法ニ合セス蓋
 シ老子意ヲ凡ソ宇宙間ニ羅列存在スル事物ノ混沌分ツ
 ヘカラサルノ時已ニ一種玄妙ノ神アリテ冥々ノ間ニ一ヲ
 生シニヲ生シ遂ニ萬物ヲ作爲スルニイタルト子之ヲ谷神
 ト名ツク即チソノ道學ノ基礎トスルトコロナリ果シテ然
 ラハ子ハ單一明白ニ自然ノ道ヲ以テ人類行爲ノ標準トナ
 シ人類ノ幸福ヲ期望センニハ自然ノ道ヲ遵奉セサルヘカ
 ラスト説ケルモノナリ而シテ子ノ自然ノ道トハ人爲及ヒ
 技術ニ反對シテ稱スルモノ、如シ故ニ第一章ニ道可道非
 常道トイヒ又五十六章ニ知者不言言者不知トイヒ又六十
 三章ニ爲無爲事無事味無味トイヘリ甚カナ老子立論ノ疎
 ナルヤ子若シ此ノ如キ重大ナル議論ヲ起州セント欲セハ
 マツ自然ノ道ナル語カ如何ナル義ヲ含有セルカヲ推校セ
 サルヘカラスト子ハ然セス明リニカクセヨカクセサルヘカ
 ト云フノミニシテ毫モ論法ニ因ラス故ニ論據トスルトコ

砂七厘ヲ混和シ、白地器ニ着色スル時ニ施用ス、蓋シ單ニ

組織スル各人箇ニ於テ亦此ノ如クナラサルヘカラストギ

ロ堅カラスシテ矛盾乖戾ヲ免レズ若シ子ハ如何ナル論法
 ナ以テ人爲技術力自然ノ道ニアラスト斷言セラレシカ又
 如何ナル推理ヲ以テ己ニ作爲セル者ヲ以テ自然ノ道トナ
 シ將ニ作爲セントスル者ヲ自然ノ道ニアラサルカ如ク論
 セラレシカト詰問スルモノアラハ子ハコレニ答フルコト
 アタハサルナラン自然ノ道ナル語ヲ分解スルニ固リ千狀
 萬態ニシテ能ク隻言一語ノ包羅スヘキニアラスト雖トモ
 左ノ二義ハ最モ重要ナリト思考スヘシ第一宇宙間ニ散布
 ス凡百諸物ノ性質第二此等諸物ヲ作爲スル所以ノ原理ニ
 レナリ而シテ其ノ已ニ有シト將ニ有ラントスルト其ノ人
 爲ト人爲ニ賴ラサルモノトチ區別スヘカラス如何トナレ
 ハ將ニ有ラントスルモノハ將ニ有ルヘキ理ヲ以テ有ント
 スルモノナレハ已ニ有ルモノト同一理ニヒトシク自然
 ノ道ナル部内ニ入ルヘキナリ人爲ト稱スルモノ外貌ヨリ
 見レハ自然ノ道ニアラサルカコトシトイヘトモ人爲ナル
 モノハ自然ノ道ヲ移轉シテ他物ニ應用スルニ外ナラス猶
 ホ約言スレハ自然ノ道ヨリ一變シタル自然ノ道トイハサ
 ルヲエス之ヲ証スル難カラス今人同一ノ力ヲ以テ同量ノ

砂石ヲ投スレハ其ノ距離同一ナラサルヘカラス又人ノ培
 養スル樹木モ山野ニ生茂スル樹木ト一樣ニ春芽ヲ抽キ冬
 葉ヲ落スニアラスヤ子ノ如ク人爲技術ハ自然ノ道ニアラ
 ストセハ左ノ如キ巨謬ヲ生セン非常ノ大風雨ニテ人類ヲ
 殘戕スルモ自然ノ道ニシテコレカ防護ノ策ヲ施スハ自然
 ノ道ニ背戾スルモノナリト豈ニ自家柔盾ニアラスヤ若シ
 物性ヲ以テ自然ノ道ナリトセハ人類ハ自然ニ稟賦セラレ
 タル化醇ノ美德アリテ年々世々野ヨリ華ニ遷リ愚ヲ脱シ
 テ智ニ進ムノ性ヲ有セリトイハサルヘカラス是レ理論上
 唯ニ然ルニアラス各國ノ史乘ニ徴シテ別ニ証明スルヲ要
 セサルトコロナリ故ニ太古蒙昧ノ民ハ知ラス後世人智發
 達スルニアタリ明ニ自然ノ道ヲ以テ己レカ行爲ノ標準ト
 ナサス己レ自身ヲ擁護スルニハ自然ノ道ヲ以テ自然ノ道
 ヲ制遏シツノ樂タリ善タル者ヲ擇ンテ行爲ノ標準トセリ
 以上論スルトコロニヨリテ之レヲ見レハ有形無形諸般ノ
 事物ミナ自然ノ範圍外ニ獨立スルノ力ナク善タリ惡タリ
 美タリ醜タリト雖トモ悉皆自然ノ道ニ從ハサルハナシ結
 局自然ノ道ナル語ハ善惡美醜ヲ總稱スルノ名目ナラサル

ヘカラス

(未完)

モ「イ」トモ「チ」トデモ「ウ」トデモ色々ニ母音ヲ變

ルヲエス之ヲ証スル難カラヌ今人同一ノカラヲ以テ同量ノ

局自然ノ道ナル語ハ善惡美醜ヲ總稱スルノ名目ナラサル

ヘカラス

(未完)

理醫學講談會演說筆記

今回東京大學教授諸君ノ開設セラレタル理醫學講談會ノ演說ヲ筆記シ之ヲ本誌ニ記載スルノ許可ヲ得タレハ別ニ其一欄ヲ設クルヲ斯ノ如シ

人ノ發音ノ理

村岡範爲 爲馳君

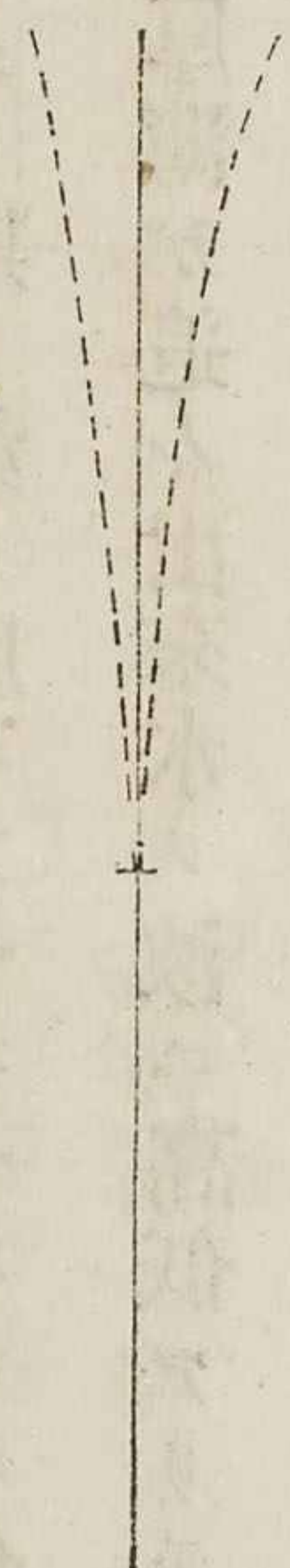
此所ニ張リタル糸アリ一弦琴ト申シマス指ニテ之ヲ彈ケハ「ピン」ト鳴リマス又此風琴ト云フ樂器ハ風ヲ行ルト同シク音ヲ發シマス(樂器ノ諸處ヲ壓ス)色々高サノ變ツタ音モ出マス人ノ聲管ト申ス聲ヲ發スル道具モ亦一種ノ樂器デスガ其一弦琴風琴等ニ異ナル所ハ何カト云フニ隨意ニ談話ヲ爲シ得ルノ一事デゴザリマセウ
今一ノ定^{キマ}ツタ音ニ就テ論シマセウニ此音釵ト云フ器ヲ弓ニテ摩レハ一ノ樂音ヲ生ス其振動ノ數ハ一秒時間ニ百二十ハナリ幾遍摩リ直スモ同シ高サノ音ヲ出シ摩リ直シテモ摩リ直シテモ耳ニ聞テ變リハナイガ人ノ聲管ニ於テハ左様デハアリマセヌ右ト同シ高サノ音ヲ出シ宛「ア」ト

モ「イ」トモ「チ」トデモ「ウ」トデモ色々ニ母音ヲ變フルコトガ出來マス底^{ソコ}デ母音ハ全体如何ナル性質ノ者カ「ア」ト「ウ」トノ間ニハ如何ナル物理上ノ區別ガアルカト云フ事ヲ明カニスルガ今日論題ノ重ナル所デ御坐リマス

此事ヲ説クニハ少シク音樂上ノ術語ヲ解釋セ子ハナラヌ既ニ樂音、振動數ナドト云フ術語ヲ使ヒシガ其等ノ事ヤ又ハ音ノ高サト云フ事ノ意味ヲ知ラ子ハ母音ノ理ハ譯リマセン

先ツ樂音トハ何ノ事カト云フニ此所ニ鋼^{ハカネ}ノ棒カアリマス萬力デ一定ノ所ヲ固ク挾ミ一端ヲ彈ケハ音ガ出マス挾ミ處デ音ガ色々違ヒマス其譯ハ棒ハ彈カレタガ爲メニアチコチト振動シマス振動ハ甚タ速カナル故一寸視タノデハ動イテ居ルカ居ナイカ譯リマセンガ棒ヲ長ク挾ミテ試驗スレハ御覽ノ通りアチコチ動クノガ視ヘマセウ(第一圖)

第一圖

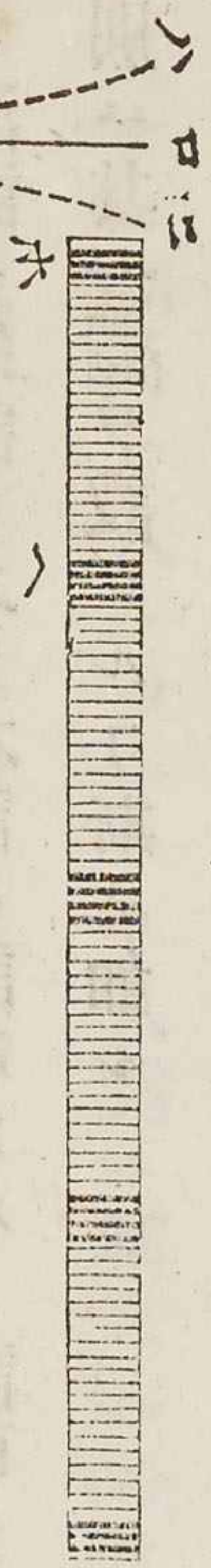


此往返ハ至極規則
ダツタ者
テ始終時

間ニ變リガアリマセン此ノ如ク振動ノ時ガキマツテ一定ノ時間例ヘハ一秒時間ニ千トカ五百トカキマツテ物ノアチコチト動ク時ニ生スル音ヲ樂音ト申シマス音樂ニ使フ音ハ皆樂音デ御坐リマス

物体振動スルモ其レノミニテハ人ノ耳ニ達セヌナリ振動シテ音ヲ發スル者ト之ヲ受ケテ聞ク耳トノ媒介ハ空氣デアリマス今此挾ミタル棒ノ端ヲ撓メ(第二圖「イロ」ヲ撓メテ「イハ」ノ位置ヲ與)テ指ヲ放テハ棒ハ平等ノ位置(イロ)ヲ越ヘテ向フ(ム)方(ニ)ニ行ク其時空氣ハ急ニ壓サレテ厚クナル又棒此方(ハ)ニ歸リ來ルト其通り過キタル所薄クナル再ヒ向フ(ム)方(ニ)ニ行クト其処又厚クナル棒ノ一度往返スル間(ニ)リ(ハ)ニ到リ又(ニ)ニ歸ル間ニ始メニ厚クナリタル処ハ彼(アチ)ノ方(「ホ」ヨリ「ヘ」)

圖 二



ニ進ミ動ケリ斯ノ如ク度々アチコチスルニ付テ棒ノ諸方ニ空氣ノ厚薄ガ追々出來水ノ波ニ高低アリテ進ムガ如ク漸々人ノ耳ニ達シマス空氣ノ此様ナル運動ヲ波動ト云フ厚處ノ間ノ長サ(ホヘ)ヲ波ノ長ナト云フ空氣ハ目ニ視ヘヌ故厚薄ノ出來ルヲヤ波動ノ工合ヲ視ルヲカ出來ヌ此所ニ之ヲ示ス爲メノ器械カアリマス今之ヲ廻シマスト波カ進ム様ニ視ヘマス(器械ハ寫シ取ル)ヲ得サリシ

此棒ヲ此儘彈ケハ音ガシマス棒ヲ少シ短カク挾メハ速カニ振動シテ振動數カ多クナリ音ガ高クナリマス今少シ短クスレハモツト高イ音ガシマス左レハ振動數多ケレハ多イダケ音カ高イノデス音ノ高低ト申シマスル事ハ世間テ申スノト私ノ申スノトハ意味カ違フカモ知レマセンガ我々ノ高イト云フハ如何ナルコト先ツ約束シマセウニ高イトハ振動ノ數カ多イノデ低イトハ振動ノ數ガ少ナイノデ御坐リマス世間デ高聲デ話シヲスルナドト申スノトハ意味カ違ヒマス例ヘハ此大ナル音釵ノ音ト小ナル音釵ノ音トハ小音釵ノ方カ高クアリマス又此所ニ大音釵ト同シ音ヲ一絃琴ニテ拵ヘ置キマシタガ振動ノ數ハ一秒時間ニ百

二十八デス糸ヲ縮メルト音カ高クナル即振動カ早クナル

眞坂アリマスマイ然ラハ音ノ高サ又ハ強サハ同シクトモ

二十八デス糸ヲ縮メルト音カ高クナル即振動カ早クナル
譯テ丁度前ノ鋼ノ棒ヲ短カクスルト同シ道程デス

又音ニ強イト弱イト區別カアリマス弱キ音ニテハ振動ス
ル者平等ノ位置(靜止ノ位置)ヲ離ル、ト少ナク強キ音ニテハ

多キナリ同シク糸ヲ彈スルモソツト彈ケハ弱ク嚴ク彈ケ
ハ強ク聞ユルナリ併シ其高サハ同シナリ

高サト強サノ別ヲ明カニセンカ爲メニ少シ例ヲ引キマス
樂隊ノ持ツ直徑三四尺モアル太鼓或ハ牛ノ「モ」ト鳴ク

音ナドハ大變強クテモ低シ又鈴虫松虫等ノ音ハ高クシテ
弱シ男ノ聲ハ通常低クシテ女ノ聲ハ高シ大人ノ聲ハ低ク
子供ノ聲ハ高キナリ

又音ニ音色ネイロト云フコカアリマス是レモ世間デ申スノトハ
違フカモ知リマセンカ我々ハ今日先ツ其意味ヲ約束シテ

話ソト思ヒマス此處ニ太鼓ト音釵アリ其振動數ハ同シ
ク百二十八ナリ故ニ音ノ高サハ同シナリ今隣室ニ或人

ヲ置キ二器ノ内一ヲ鳴ラシ此音ハ音釵カ太鼓カト問ヘハ
何人ニテモ聞キ分ケテ正シク答ヘマセウ琴、胡弓、笛、鐘等

ニ於テモ同様ニテ上野ノ鐘ヲ聞キテ尺八ト聞違ヘル人モ

ヲ一絃琴ニテ拵ヘ置キマシタガ振動ノ數ハ一秒時間ニ百

眞坂マサカアリマスマイ然ラハ音ノ高サ又ハ強サハ同シクトモ

何處カ違フ處カアルニ相違御坐リマセン我々ハ其差ヲ名
ツケテ音色ノ差ト言フト思ヒマス世間デハ音色ト申ス

トモ猶耳ニ感シテ差等アルコトヲ音色ノ差ト申シマセウ底
テ音色ノ差ハ如何ナル譯ゾト申ス面白ク且ツ隨分六ヶ數

問題カ起リマセウ其レニ付テハ又先ツ其爲メニ要用ナル
一二ノ件ヲ説カナハナリマセン

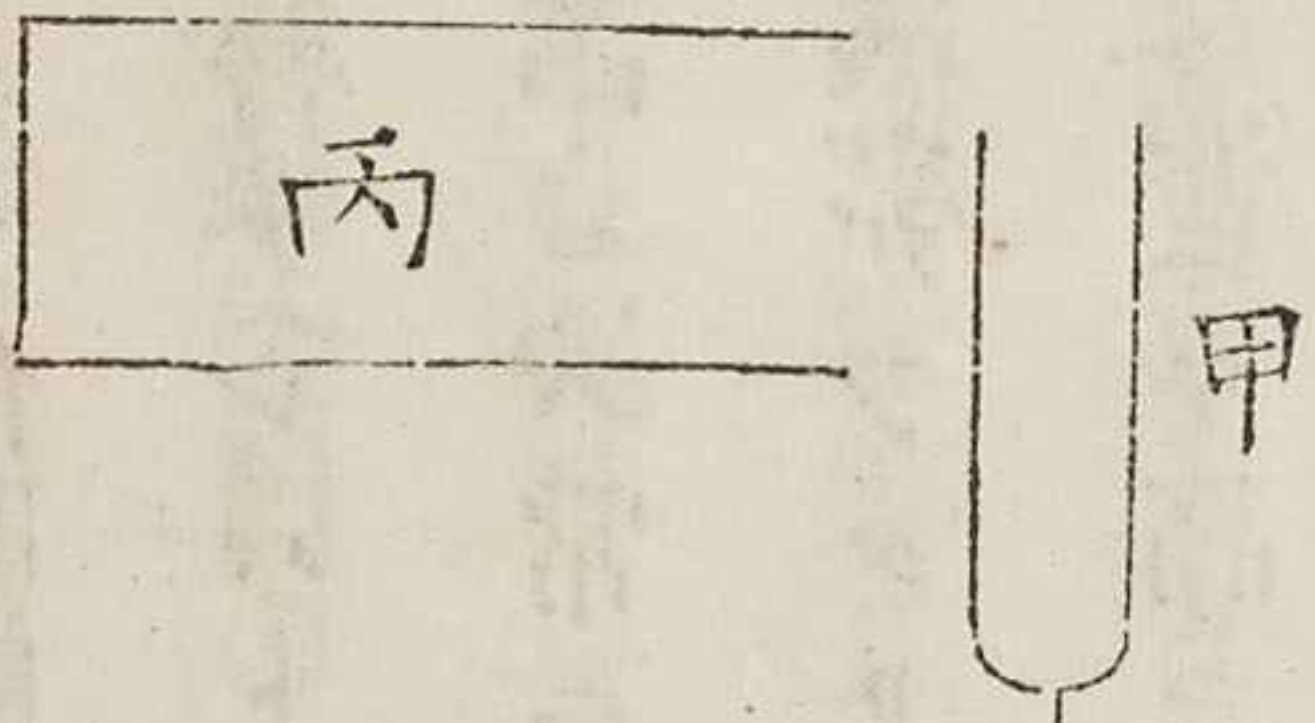
第一ハ共鳴ト申ス事デス即チ一ノ物体カ外ノ物ト共ニ鳴
ルト云フコナリ此所ニ音釵アリ(第三圖「甲」)其柄ヲ握リテ一

度机ニ擊チツケ空中ニテ持ツテ居ルト音カ有ルカ無イカ
知レヌ位ナリ之ヲ此箱(第三圖「丙」)ノ口ニ齎ラセハ大層強ク

鳴リマス其理ハ振動スル音釵
ノ口ニ到ル時ハ箱ノ中ノ空氣

其振動ヲ受ケテ共ニ鳴ルニ依
ルナリ是レヲ共鳴ト云ヒ其箱

ヲ共鳴箱ト申シマス
又物ニ固有音ト申者アリ此所



第三圖

ニ甲乙ノ二音釵アリ又丙丁ノ箱アリ甲ヲ机ニ擊チツケ丙

箱ノ口ニ齋ラセハ共鳴ス乙ヲ擊チテ丁箱ノ口ニ齋ラセハ

又共鳴ス然レモ甲ヲ下ニ齋ラシ或ハ乙ヲ丙ニ齋ラスハ

更ニ共鳴致シマセン又此所ニ長キ玻璃筒アリ(第四圖戊)

甲ナル音釵ヲ擊ト同シ試驗ヲ致シマスルニ筒ハ共鳴シマ

セン併シ筒中ニ除々水ヲ注キ入ルレハ次第ノ音カ聞

ユル様ニナリマス、ソ

見ルト筒中空氣ノ共

鳴スルトセヌトハ其

長サニ關係スルヲカ

譯リマス今筒中空氣

ノ長サト前ノ丙ナル

箱ノ長サトヲ比較シマスニ同シトデス然ラハ此音釵ノ音

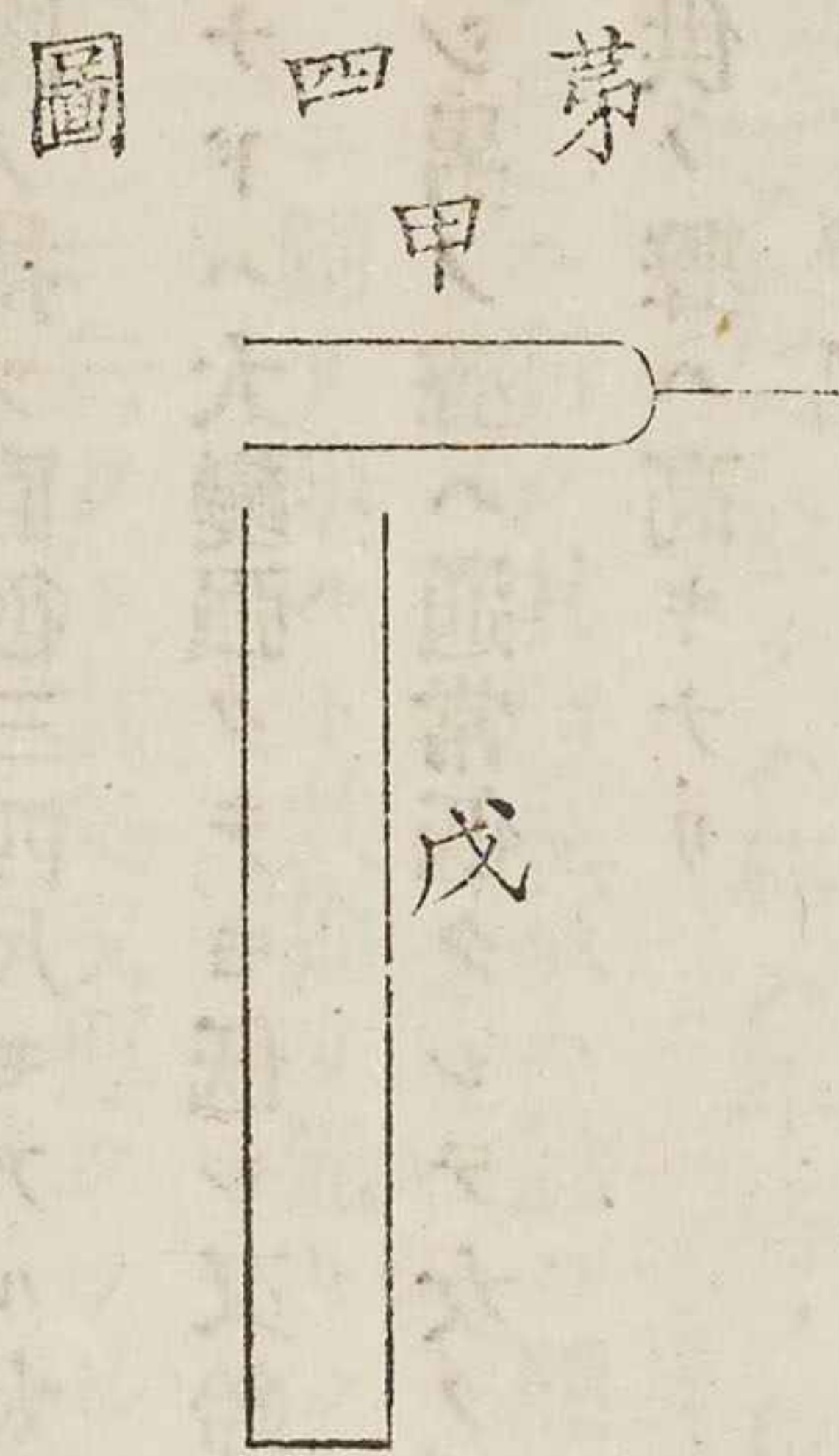
ハ此長サノ空氣ノ持前ナル音ト云フテ宜シイデセウ之ヲ

固有音ト申シマス凡ソ如何ナル物ニテモ固有音ガアリマ

ス若シ其側邊ニ於テ之ニ適スル振動アルハ必ス共鳴致

シマス法螺貝ノ如キ者ヲ耳ニ當テ又ハ御宮ノ脇ノ石穴ナ

ドニ耳ヲ當テルト何時デモ「ワー」ト鳴リマス是レハ即チ



其固有音ニテ何時聞イテモ同シ高サノ音ガシマス併シ如

何ニ固有音ナレバトテ何モ原因ナク自分獨リテ鳴ル譯デ

ハナイ空中ニハ常ニ風アリテ樹木ヲ動カシ又水カ流レタ

リ人ノ話聲ガシタリ常ニ音ノ絶ユルコトガナイ其音ハ餘程

混リタル者ニテ高キ音モ低キ音モ互多雜ナリ其故ニ法螺

貝ノ石穴ノ中ノ空氣ハ自分ノ氣ニ合フタル音ヲ求メ出

シテ共鳴スルナリ謠ヒノ上手ナ人カ障子ヲ振ハセルノ謠

ヒ破ルノト云フ嘶カアリマス是レハ即チ固有音ノ一件テ

障子ノ振フモ道理デス又其聲強キハ隨分破レナイトモ

言ヘマセヌ

(未完)

雜報

○蠶寄生蛆の説 理學士佐々木忠二郎氏が昨年中より蠶

に寄生せる蛆に就き研究し居らるゝことは既に當雜誌に

載たるか去る六月中旬ふ至り全く成就し該蛆の卵子より

發生して再び卵子を生じに至る迄の發生經過と残りなく

發見せられたり且つ其發見に據り之を驅除する方法も

工夫せられし由若し自今養蠶を業とする者心を用ひて氏

の方法に従はぬ蛆の害ハ全く去り得可きこと期す可きな

褒賞金の如きは輒近著明なる者なり夫れ新工風の器械杯

ドコ耳ヲ當テルト何時デモ「ワー」ト鳴リマス是レハ即チ

工夫せられし由若し自今養蠶を業とする者心を用ひて氏

の方法に従はハ蛆の害ハ全く去り得可きこと期す可きなり往年佛國學者パストール氏ハ蠶の病を研究して其名を得たり佐々木氏も亦た養蠶業の爲に盡したる功實に大なりと云ふ可し又氏の研究ハ純正理學の有用なるを證するに足る可し抑も本邦に於て養蠶の業起りしより今日に至るまで數百年間實地家の寄生蛆を見たる幾度なる哉數ふ可らずと雖も之を不問に措くか或ハ心あるも研究するの力なく奇々妙々此説を唱へ唯其の害あると歎したるに止れり佐々木氏動物學の理を知りて一度此事に従事し歳余よして其功を跋り驅除の方法を發見するに至りたり純正の理學なくハ實地の業進まさること明白なり佐々木氏幸に當雜誌の爲に氏の研究の要点を記さんとを諾せられたり即ち本號に其第一回を載す養蠶に従事する者は勿論世の學問進歩を知らんとするものハ就て見る可し

○外國にては佐々木氏の如き發明となしたる者にハ年金若くは莫大ハ褒賞金等を與ふるを以例となせり則ちパストール氏が脾熱及び蠶病等の研究の爲に受られたる年金、コッフ氏がコレラ病原研究の功の賞として受られたる

褒賞金の如きは輒近著明なる者なり夫れ新工風の器械杯を發明する者の如きは專賣の權を有するとなるが故に世に有益なる器械ならば發明者が己を利する所も亦少ならずと雖もコッフ氏パストール氏佐々木氏等の發明の如き者に至りてハ固より專賣權杯を受得べき性質の者にあらずして其發明の爲に普く天下の人を利するとい多けれども本人を利するとの出來ざる者なるが故に政府にて斯の如き發明者にいさゝか褒賞金杯を與ふるハ不當なることにはあらざるなるらん我邦にハ未だ斯の如き發明者に年金若くは褒賞金を杯を與ふるの成規なきはいまだ斯の如き發明者のあらざりし故ならんか既に佐々木氏の發明の如き者のある以上は我邦に於てもハ國同様の成規と立てられんとこそ願はしけれ併し佐々木氏の發明の大功なるを知る者尠なき而已ならず駒場農學校の教員中に理學士佐々木忠次郎氏其人のあるさへに知る者の尠なき如き時勢にては嗚呼

○獨乙虎列刺委員の褒賞金 獨乙政府ハ過般埃及及ヒ印度へ派遣したる虎列刺委員コッフ始め一同へ褒賞として

金十三萬五千「マルク」を授與すると決したりと云ふ

○海岸生物學研究會 頃日英國に於て設立したる十號の學會ハ先ツプリマスに於て研究場を建つる目論見なりと又彼の有名なる學士ハックスレー氏は同會の會長となられたりと云ふ

○髮の毛の數 英國のドクトル、ウヰルソン氏ハ人間頭上髮の毛の數を計算し十人並の頭の上「一インチ」平方の内には千〇六十六本ありといへり此割合にてハ全頭には十二萬七千九百二十本なるべし又最も毛多き者八十五萬本の多きに至るべしといへり

○東京化學會にては先般より時々集會せられて化學上の譯語と定められる由なるが會員中には兎角畫の多き字を組合して最も六かゝき譯語を作らねば學者でなす様と思はるゝ者が多き故にたま〜誰にも分り易き語を採用せんを主張せらるゝ者ありてもこれまでいつも多勢に無勢にて敗北せられたりしが頃者此主義と主張する者大に増加して多畫字者流と強く攻撃せられたれば多畫字者流も大ふひるみたる由なり

○東京大學教授外山正一君は辻新次後藤牧太西村貞の諸士と共に去月十五日に埼玉縣川越へ出張せられ同所川越學校に於て教育上の演説をせられたり當日ハ該校が過般文部省より一等獎勵品を賜りたる爲の祝宴を開きたる日なり○辻外山、西村、大島、渡邊の諸士は去月廿二日ハ千葉縣教育會の招に應じて千葉へ出張せられ同所縣會議事堂に於て各々得意の演説とせられたり該日ハ大隈氏の専門學校の生徒が頃者おこされたる同攻會と云ふ學術研究會の初會の日なるが故ハ外山正一君も臨席して演説せられんを該會より依頼ありたれども千葉行の爲に遺憾ながら同攻會へハ臨席せざりし由なり

○朝鮮國出張 東京大學御用掛江沼五郎氏ハ客歲中朝鮮南方ヲ遊歴シテ動植物等夥シク採集セラレシカ本年再ヒ同國へ出張ヲ命セラレ既ニ去ル十日發足セラレタリ今回氏ハ重ニ北部ノ地方ヲ經歷セラル

○ウルツ氏 今年ハ化學の爲ハ如何なる不幸の年なるや佛國の大家ヂュヤー氏と亡ひしは去る四月十一日の事なりハ又もや其翌月即ち五月十二日に同國の有名なる

化學家ウルツ氏には六十七歳を一期と去て長逝せられし

又ハ湯ノ中ニ入レ弱火ニテ烹詰メ食スヘシ○又玉子ノ黃

流も大ふひるみたる由なり

なりしが又もや其翌月即ち五月十二日に同國の有名なる

化學家ウルツ氏には六十七歳を一期と去て長逝せられし
と氏は堂々たる新式化學家にして此の學の三四十年來著
しき進歩を爲したるは多く氏の功に因れり

○大學理學部卒業生 今年同部卒業諸氏の姓名並に卒業
論文の論題を聞くに物理學科には山口銳之助君「ニッケル」
の熱「エレキ」論、純正化學科には吉武榮の進君毒ウツキ
毒分の説、高嶋勝三郎君紫根色素の説、製造化學科には横
地石太郎君製紙論、増島文二郎君茶種油並に荳油の説、安
藤格君赤染トルケイレッドの説、地質學科には三浦宗次郎君土佐東濱ノ
地質論採礦學科に石川直記君別志銅山の説、其他數學科
にて高橋豊君土木工學科には山崎鉦一郎君の由なるが右
兩氏の論題はつい聞き外すしぬ

雜 錄

○ 素徒西洋料理法第四圖 吸 々 夫

第一味

(葱肉羹) 細ク切リタルネギヲ牛酪ニテ痛メイタ温飩粉ヲ加
ヘテ少シ烹轉ハシ牛乳ニテ解キ鹽ト胡椒ヲ加ヘタル肉羹

又ハ湯ノ中ニ入レ弱火ニテ烹詰メ食スヘシ○又玉子ノ黃
身ヲ湯ニテ解キ右ノ熱肉羹中へ入ル、モヨシ但シ黃身ヲ
入ル、ノ後ハ烹ルヘカラス

第二味

(鯖ノ腹詰) 鯖ノ腹綿ヲ取り出タシテ善ク掃除シ表面
及ヒ腹中ニ鹽ト胡椒ヲ塗り付ケ置キ。○芹、人參ヲ細ク斷
ミ鹽胡椒ヲ加ヘ牛酪ニテ痛メ。之ヲ鯖ノ腹中ニ詰メ込ミ
細キ絹糸ヲ以テ縫ヒ閉チ。皿ノ中ニ牛酪ヲ多量ニ敷キ其
上ニ置キ又其上ニ牛酪ヲ載セ麵包粉ヲ振り掛ケ醋ヲ一杯
入レ「テンパン」ニテ焼クヘシ。若シ焦ケ付ク時ハ少シ湯
ヲ加ヘテヨシ○食スル時ニハ皿ニ滲レル汁ヲ掛ケヘシ

第三味

(豚ノ腹詰) 豚ノ腹ヲ裏返シ鹽ヲ付ケ小刀ニテ摩擦シ
芳野紙ノ如ク薄クナシ一端ヲ糸ニテ縛リ。豚ノ善キ身
ヲ庖丁ニテ細ク敲キ鹽胡椒ヲ交セ。細ク斷キサミタル人
參ト○ニ鹽胡椒「セーヂ」「タイム」ヲ加ヘ牛酪ニテ烹轉
ハシ。之ヲ前ノ肉ニ交ヘテ善ク敲キ合ハセ。上戸ヲ腹ノ他
端ニ縛リ付ケ右ノ肉ヲ固ク詰メ込ミ糸ニテ口ヲ閉。牛酪

或ハ脂ヲ以テ弱火ノ上ニテ氣長ニ燒キ宛針ニテ諸方ニ穴ヲ明ケ茶色ニ焦ケタル時取り出タシ暖カナル内ニ區スヘシ

(價醋菜) 「キヤペツ」ヲ粗ト湯テ水氣ヲ取り細長ク刻ミテ鍋ニ入レ肉羹一杯、味淋半杯、醋四半杯ヲ注キ右ノ葉ト平ラニナル位ニシ鹽胡椒少許豚又ハ牛ノ脂身ヲ澤山入レテ烹ルヘシ食スル時ニハ脂身ヲ取り去ルヘシ。脂身ハ多量ヲ宜シトス。○此菜ハ總テ油濃キ肉類ニ添ヘテヨシ

第四味

(ピステキ) 善キ牛肉(股肉)ヲ厚切ニシ庖丁ノ背ニテ敲キユナシ鹽胡椒ヲ振リカケ。淺キ鍋ニ底ノ隠レル程牛酪ヲ解カシ右ノ肉ヲ並ヘ強火ニテ急ニ燒クヘシ。○燒ケ方ノ生熟ハ人々ノ好ニ從フヘシ

(肉サラダ) 肉類玉子、奕根、人參、各々熟烹シタル者ヲ賽ノ目ニ切り(奕根ハ三時間湯テルヲ要ス)罐詰ノ糖隠元「セレリ」玉子「ケパルス」胡瓜ノ醋漬右各々細ク切り醋油、鹽、胡椒、ヲ加ヘ右ノ諸具ヲ一處ニ交セ合ハセ鹽加減ヲ試ミ之ヲ皿上ニ盛リ。「マヨネーズ」汁(第二回○四味)ヲ諸具ノ隠ル、程掛ケ机上ニ齎スヘシ

後口

(醬液用水菓子) 水菓子ヲ製スルニハ雪、食鹽ヲ混合シテ寒劑ヲ造ルヲ最モ簡單ナリトス其法先ツ並ノ鹽五合許ヲ搗盆ニテ擦リ又氷二三斤ヲ雪ノ如ク細末コシ深サ五六寸直徑四寸程ノ木箱或ハ瀬戸物(圓形辨當箱ノ類)ノ

中へ右ノ氷ト鹽ヲ代々ル重子テ數層ヲ爲シ其中ニ凍ラスヘキ液ヲ有ツ筒(液筒ト名ツク)ヲ入レテ攪キ廻スルハ鹽氷相混スルニ從ヒ漸々溶解ス其際氷ノ未タ溶解セサル者ハ上浮シ鹽ハ下沈ス是レ寒劑ノ爲ニ利アラヌ故ニ怠ラス液筒ヲ以テ交セヘシ(又ヒ子ヲ以テ鹽ヲ攪起スルコアルヘシ)然ルルハ數分時或ハ數十分時間ニシテ筒中ノ液凍結ス凍結ノ時間ハ液ノ製法ニ依リテ長短アリ玉子、牛乳、砂糖、或ハ粘粉等ヲ含ム液ハ凍リ易ク酒類ヲ含ム者ハ凍リ難シ。液筒ハ建金製茶入レニテ可ナリ(筒ハ必ス金屬ナラサル可ラス)凍リタル菓子ヲ筒ヨリ出タスニハ先ツ手ヲ以テ少シク筒ヲ温メサル可ラス若シ少シ口ノ開キタル圓錐形ノ筒アルルハ便ナリトス水菓子ノ液中ニハ隨意ニ香料甘劑等ヲ交ヘテ可ナリ唯酒氣ハ過分ナラサルヲ要ス次ニ醬液ノ製法ヲ記シテ一例ヲ示ス

醬液ヲ小許ノ水ニテ烹出シ理細キ麻ノ切ヲ以テ漉シ其液ニ砂糖ヲ交ヘテ烹立テ液筒ヘ入ルヘシ (晚餐終)

學會記事

○東京化學會記事 明治十七年六月廿一日午后一時ヨリ例場ニ會ス「農商務省工務局ヨリ同局月報第十八號ヨリ第二十二號迄五冊ヲ、工學會ヨリ工學叢誌第二十八卷及ヒ第二十九卷ヲ、理學協會ヨリ同會雜誌第五卷及ビ第六卷ヲ、萬年會ヨリ同會報告第六輯第三卷ヲ、日本地震會ヨリ同會報告第一冊ヲ、駒場農學校教師オケルテル氏ヨリ

同氏著農事研究報告一冊ヲ、會員櫻井錠二氏ヨリテ

告セリ右ノ諸項ニ就キ各々討議アリタリ」菊地大麓山川

五六寸直徑四寸程ノ木箱或ハ瀨戶物(圓形辨當箱ノ類)ノ
リ同會報告第一冊ヲ、駒場農學校教師オケル子ル氏ヨリ

同氏著農事研究報告一冊ヲ、會員櫻井錠二氏ヨリ「ヂエ」
エスアインクマン氏著日本有毒植物試驗說一冊ヲ本會へ寄
贈セラレタリ「過般改正シタル本會規則中尙ホ二三件ヲ
修正ス、次ニ之ヲ來七月ヨリ實行スル」ニ決ス「例ニ依リ
投票ヲ以テ役員ヲ改撰スル」左ノ如シ

會長 櫻井錠二

書記 高松豐吉 松井直吉

會計掛 石藤豐太 織田顯次郎

編輯掛 植田豐橘 久原躬弦 高山甚太郎

河喜多能達 坪井九馬三

抄録掛 石藤豐太 久原躬弦 高松豐吉

松井直吉 櫻井錠二

増島文二郎氏油試驗ノ成績ニ就キ演說ス、次ニ櫻井錠二
郎氏「マ氏略傳ヲ演ス」雜話中高松豐吉氏簡易紺染方ノ
改良法ヲ述フ「此日出席會員廿五名ナリ

○東京數學物理學會 七月五日午後一時半ヨリ東京大學
ニ於テ常會ヲ開ク「事務委員川北朝鄰君第五期ニ關スル
會計報告及ヒ前會ノ記事ヲ朗讀ス」地震學會幹事菊地大
麓君ヨリ同會記事第一冊ヲ寄贈アリタリ「山川健二郎君
ハ分光器觀測法ヲ寺尾壽君ハ岩田好算翁問題ノ例解及ヒ
數術ヲ川北朝鄰君ハ關孝和先生ノ略傳並ニ本邦數學ノ變
遷ヲ演述セリ」志賀泰山君ハクラカウ府大學教授ウロブレ
ウキ一氏酸素壓縮酒精凝固ノ試驗ヲ山川健二郎君ハ本年
四月巴里府電學會會議ニ於テ議定セル電學上二位ノ事ヲ報

告セリ右ノ諸項ニ就キ各々討議アリタリ「菊地大麓山川
健二郎寺尾壽村岡範爲馳川北朝鄰ノ五氏ヨリ左ノ動議ヲ
起セリ

動議案 本邦數學中興ノ祖關孝和先生ノ名譽ヲ博スル爲
メ本會ニ於テ廣ク有志者ヨリ金圓ヲ募集シ其利子ヲ以テ
關賞牌ト稱スル金牌ヲ製造シ數學上有功者ニ授與スルノ
法ヲ設ケント欲ス但シ其方法規則等ハ委員ヲ撰ミ調査セ
シムル事

右ノ案ニ就キ暫時討議ノ上一同賛成ヲ以テ可決ス川北山
川村岡ノ三氏其委員ニ當撰セリ「又本期ノ役員ヲ改撰セ
シニ當撰ノ上承諾セル諸君左ノ如シ

事務委員長

村岡範爲馳

事務委員

會計 川北朝鄰

記錄 中川將行

全 隈本有尙

全 難波正

編輯委員

山川健二郎

寺尾壽

川北朝鄰

荒川重平

村岡範爲馳

外國雜誌報告委員

田中正平

英 山川健次郎

中川將行

荒川重平

佛 寺尾壽

佛 難波正

三輪桓一郎

村岡範爲馳

獨 北尾次郎

志賀泰山

○哲學會報告 第一會ハ明治十七年一月廿五日學習院内ニ開ク本會假規則八章ヲ議定シ爾后例會ハ東京大學内ニ開クコト決ス 第二會ハ二月十一日東京大學内ニ開ク席上演説左ノ如シ 法字ノ説 嶋地默雷 東洋哲學大意 井上啓二郎 第三會ハ三月二十日例場ニ開ク入會規則五條ヲ議シ及ヒ入會人ノ投票アリ席上演説左ノ如シ 印度哲學ト諸學ノ經庭アル説 原坦山 斯賓撒氏ノ不可知的ヲ論ス 外山正一 第四會ハ四月二十日例場ニ開ク席上演説左ノ如シ 依正二報 神原精二 第五會ハ五月二十日例場ニ開ク入會投票及ヒ席上演説アリ演説左ノ如シ 意ヲ論ス 嘉納治五郎 哲學問題時十八條ヲ論ス 長瀬時衡 第六會ハ六月二十日例場ニ開ク投票演説及ヒ討論アリ討論ハ哲學問題第壹條ヲ議シ演説ハ左ノ如シ 耶蘇ヲ論ス 三宅雄二郎 諸法ノ原理 吉谷覺壽 七八二ケ

○哲學會假規則

第一章 會名
本會ヲ名ケテ哲學會トス
第二章 目的
本會ノ目的ハ哲學ヲ研究スルニアリ
第三章 會員
本會ノ會員ハ哲學ニ從事スルモノニ限ル
第四章 會日
本會ハ毎月二十日午後正三時ヨリ開ク其他時宜ニヨリ臨時會ヲ開クコトアルベシ
第五章 入會
入會ヲ請フモノハ其趣會員ノ紹介ヲ以テ書記ニ通シ書記ハ之ヲ會員ニ謀ルヘシ
第一條 入會ヲ請フモノハ其本籍姓名職業ヲ紹介

人ヨリ書記ニ届ケ置クヘシ
第二條 入會ノ可否ニ會員ノ無名投票ヲ以テ定ム
第三條 入會投票ハ書記ヨリ其本人ノ姓名ヲ會員ニ報道セシ時ヨリ一ヶ月ヲ經テ行フベシ
第四條 投票中入會ヲ可トスルモノ出席會員ノ過半数ヲ得ルニアラサレハ之ヲ許サス
第五條 出席會員其總數ノ半ニ滿タザルハ投票ヲ行ハズ
第六條 會費
會員タルモノハ毎月會費トシテ金拾錢ヲ出スベシ但臨時入用ノ節ハ會費ノ外ニ出金ニ要ス
第七條 職員
本會職員ハ書記二名ト定ム但當分東京大學寄宿舎内ニアルモノヲ以テ此任ニ當ツ
第八章 議事
本會ノ事ニ關スル諸議ハ會員ノ多數説ニヨリテ決ス

○哲學會々員

- | | | |
|-------|-------|-------|
| 伊澤修二 | 原 坦山 | 西 周 |
| 西村茂樹 | 濱野定四郎 | 島尾小彌太 |
| 外山正一 | 戶田恒太郎 | 千頭徳馬 |
| 小崎弘道 | 加藤弘之 | 神原精二 |
| 嘉納治五郎 | 吉谷覺壽 | 棚橋一郎 |
| 辰己小二郎 | 中村正直 | 長澤市藏 |
| 長瀬時衡 | 井上圓了 | 井上哲二郎 |
| 大内青巒 | 松本源太郎 | 福富孝季 |
| 二見康時 | 小池靖一 | 寺田福壽 |
| 有賀長雄 | 阪倉銀之介 | 佐々木東洋 |
| 北島道龍 | 三宅雄二郎 | 三島 毅 |
| 島地默雷 | 島田重禮 | 日高眞實 |
| 千賀鶴太郎 | | |
- 右ハ六日常會ノ節定ムル所ニヨル